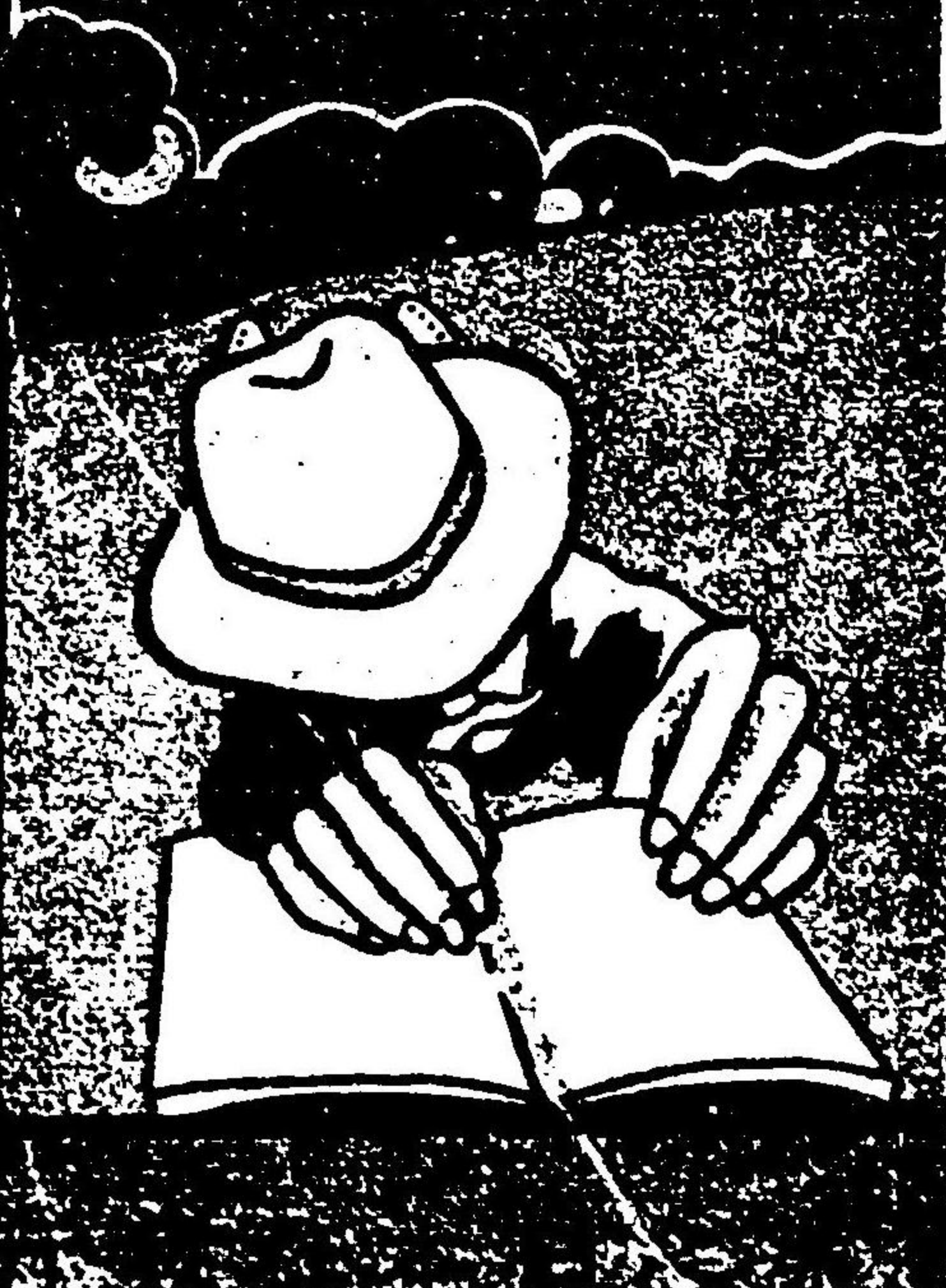


著 生 溢 嬌

珍 獨  
話 笑



2

或る年大機へ行く途中、蒸車の中に二人連れの  
 者が自分と向ふに乘つて居つた。右なる背席の紳  
 士は或雑誌を披けてそれをぐるぐら巻にして、  
 笑ひながら讀んで居たが、何だか可  
 笑の事があると思つて、獨りて屢々微笑を洩らして  
 居るのを見受けた。餘程可笑い事でも書てあるの  
 であらう、動もすれば噴き出しさうな可笑さを強いて  
 抑へながら讀んで居たが、遂にどつと噴き出して、驚

よしがき

紳 紳 23  
 内交

き訝る隣友に「マア兎に角讀て見給へ」と言つて其雑誌を投げ與へた。左の和服の紳士は其れを取上げたのを見ると「實業之日本」であつた。言ふまでもなく彼れは「一日ばなし」を讀て居たのだ。世には笑ふべき事も多いが、凡そ人が無意識で失敗した滑稽珍談ほど可笑くて人の臍を撚らすものはない。といふのは、元と無意識で演じた事であるから罪がなく、厭味がなく、本人の耻にもならず、他人は氣の毒とも感ぜず、そして滑稽の極を極めるのだから、哄笑に値するのであらう。殊に其滑稽珍談の

主人公が當代知名の人で、平生は極めて嚴格なる面貌にて天下萬衆の前に活動して居る人なるに至つては、其反映の妙言語に絶して、其人と其事と共に千古に傳ふべき珍談も少なくはない。

余は明治卅三年以來「實業之日本」誌上で、當代知名の士に依て演ぜられた此等の滑稽なる珍談奇聞を探索して毎號書いて居る。此れが即ち「一日ばなし」といつて、前に述べた汽車中の紳士が獨笑禁する能はざりし其ものである。有らゆる頁、有らゆる行に於て天下の最善を盡す精神で編輯されて居る「實業

之日本」であるから、此滑稽珍談も亦珍中の珍即ち「多く世人に知られて居る知名の人」に依て演ぜられた事で、而かもそれが「未だ世人に知られざる秘密の事」でなければならぬ。嬌溢生の苦心は實に一通ではない、幸にして今日まで毎號天下の喝采を博し、否讀者の願を解き來つたのは、自分ながら頗る満足する所である。而して今後は更に一層の満足を得んことを期待して居る

先年來讀者諸君より「一口ばなし」を纏めて一冊の書籍とせよとの請求が續々あつた。頃日に至て此請求が益々頻繁となつて、中には左の如き書簡を寄せられた人もあつた。

嬌溢生足下、余は毎號 實業之日本 を手にするや、必ず先づ 一口ばなし を讀む。余の之を讀むや決して單に余の好奇心を満足せんがためにあらず、余は

- 一、忙裡之を讀て心機を一轉し
- 一、閑時之を讀て無聊を忘れ
- 一、儕時之を讀て慰安を得
- 一、獨笑に依て陰氣を散じ
- 一、哄笑に依て精神を快活にし
- 一、精神の開擴に依て健康を増進す

貴社若し集めて一冊となさば斯の如き幸福を享くる者獨り余のみ  
にあらざるべし……

是も一理がある。カーネギー翁やマーティン氏などは  
「笑」を以て成功の一要素に數へて居る。依て遂に讀  
者の請求に従て卅四年より本年八月迄の「一日はな  
し」の内て珍の珍なるものを精選して多少の増補訂  
正を加へ、之を小冊子に纏めて出版することにした  
命題を「獨笑珍話」としたのは、漁車中の一紳士か  
ら思付いたのである。幸に多忙の人が本書を繕いて  
精神の休養となつたり、又は無聊に苦む人が本書を

讀で多少の慰安となつたらば、望外の幸です

實業之日本編輯樓上に於て

嬌 溢 生

獨笑珍話目次

○ 抜かつたり、千古の失策	一
○ 滑稽な悪戯	七
○ 骨董品の大滑稽	二一
○ 茶席のシクジリ	二六
○ 膏を紋られて得意なり	三一
○ 益田兄弟の火事珍談	三五
○ お門違ひの大滑稽	三〇
○ 學者のシクジリ詰	三三
○ 大ハイカラの今昔	三八
○ 維新豪傑の素破抜き	四五

明治  
40 0. 28  
内交

目次

○ 威遠ひの失敗……………五二

○ 滑稽なる奇行……………五六

○ 陸奥宗光女の追剝に遭ふ……………五九

○ 圃基珍談……………六三

○ 粗忽な話……………六九

○ 酷評にシクシル……………七二

○ 未知の人と相乗り……………七六

○ 香奠に釣銭なし……………八〇

○ 新婚物語(其一)……………八五

○ 同 (其二)……………八八

○ 新聞記者の大椿事……………九一

○ 善は急げ……………九八

○ 歡迎の裏面……………一〇二

○ 鐵道創設奇談……………一〇七

○ 維新當時の奇談……………一一六

○ 萬國大博覽會出品の滑稽……………一二一

○ 演説の起原……………一二四

○ 支那の奇風……………一二九

○ 北京の奇習……………一三六

○ 骨相學から觀たる實業家……………一三九

○ 小説家の體格……………一四五

○ 異性異質の配合……………一五〇

○ 札幌農學校の學風……………一五四

○ 奇傑、奇策に乗せらる……………一六〇

獨笑珍話

○戦機と商機……………一六五  
○商人立志編中の人物……………一六九  
○貧兒の奮闘……………一七六  
○一方は大臣、一方は落語家……………一八二  
○奇人の奇行……………一八六  
○文學者と捕虜珍客……………一九一  
○豪遊譚……………一九六  
○東郷大將の機智……………一九九  
○勇氣は國威國光から……………二〇三  
○亞米利加迄一寸……………二〇八  
○謠曲物語……………二一二  
○奇問奇答……………二一七

○健脚家の話……………二二三  
○妻君にシクシル……………二二八  
○意氣地なき珍談……………二三〇  
○疾病は氣から起る……………二三四  
○胃癌と慰安……………二四一  
○往診料一萬圓……………二四五  
○霹靂一聲退校處分……………二四八  
○書畫の喰はせ物……………二五三  
○骨董商湯屋の見張人に及ばず……………二五七  
○蒙古偵察奇談……………二六一  
○ブライアンと大隈伯……………二六五  
○博士の艶福……………二七〇

目次



◎外交官の夫人……………二七五

◎一杯喰はさる……………二七八

◎勤儉貯畜家の奥の手……………二八二

◎假名違ひ奇譚……………二八八

◎漂流實譚……………二九二

◎大隈伯と間違へらる……………二九八

◎實業家と書畫骨董……………三〇二

◎名士の兄弟……………三〇六

◎名士の手跡……………三一〇

◎姓名のはなし……………三一七

◎小兒の行爲……………三二三

◎餘興疲して隱藝……………三二九

◎支那の看板文學……………三三二

◎歐米視察の土産……………三三六

◎ブライアンの日本觀……………三四一

◎不思議館の怪物に欺さる……………三四四

◎怪物の仇討ち……………三四八

◎樂天上戸の失敗……………三五二

◎晴衣の失敗……………三五六

◎木綿の古禪廿五回……………三六〇

目次終

獨笑珍話

婿 湯 丈 着

抜つたり千古の失策

◎大日本麥酒株式會社社長馬越恭平一夕築地の瓢屋へ往つて、入口の帳場に坐つて居る亭主に向ひ、オイ錢入を忘れて來たから一寸金五拾圓貸して呉れまいかと言ひつゝ、手鞆の内から萬年筆を取出し、自分の名刺に何かスラ／＼と書いて亭主に渡したさうな。

◎亭主はへい宜しう御座いますと言ひながら早速名刺を推戴いて見ると金の渡先さが書いてあるのて、委細承知致しましたと答へた、スル

抜つたり千古の失策

と馬越は其名刺を破つて煙草盆の隅へ入れ、其儘直に車を飛ばして何處へか往つたさうな。

◎藤田傳三郎の一子平太郎其際瓢屋へ往つて居たので、偶然にも馬越が金を貸して呉れよと言つた一語が耳に入り、之れには何か仔細があらうと俄に好奇心が起つて襖の隙から覗いて見ると、名刺を破つて煙草盆の隅へ入れた様だ、此奴愈々面白いと馬越の立去るを合圖に何喰はぬ顔して帳場へ出懸け藝妓に命じて其煙草盆を自分の室へ持たして遣つたさうな。

◎さて室へ戻つて藝妓お里、小花の兩人を相手に早速名刺の破つた屑を綴り合して見ると……一金五拾圓也右林屋小さんへ御渡被下度候瓢屋殿馬越恭平……と現はれた、藤田手を拍つて喜び、林屋小さんと云へば赤坂の藝妓だ、之れには種々の魂膽があるに相違ない、何か悪洒落を

やりたいものだ、直に後藤新平、後藤猛太郎、杉山茂丸の三人に向つて非常招集を發したさうな。

◎四人相集つて謀議を凝したが、後藤新平は之れを寫真に引延ばしてはドウだと發議した、一同其れは頗る妙だと言つて杉山茂丸は自分の關係して居る三興合資會社へ命じて寫真に引延ばすことに一決し、其れから後藤猛太郎は其寫真を軸物にしたら宜かろうと云ふので表装方を引受けたさうな。

◎何しろ悪黨連の事だから様々の悪智恵は出たが、此先は何分大切ゆへ、日露戦争の參謀總長をやられた兒玉大將閣下に相談したら必ず名案が出るだらうと云つて、後藤新平は其吏者になつた、後藤は兒玉に向て斯様／＼な珍事か起りまして、軸物迄には仕上げたが、此先は大將閣下の御智恵を拜借したいと述ぶるや、兒玉は膝を叩いてソレは近

來の珍談だ、好しく我に一策あり千古の大珍聞にしてやらうと言はれたさうな。

◎如何なる名案奇策かと後藤は片唾を呑んで居ると、兒玉はドウだい馬越に御馳走をさせようぢやないか、そうすれば僕は此軸物を土産に持つて往くが……と言はせもあへず後藤は其れは非常に面白い、是非閣下始め悪黨の面々數名を馬越に招待させましようと言つて歸つたさうな。

◎後藤は歸來早速右の次第を仲間に傳へると杉山は馬越勸誘係になつた、一日杉山は馬越を訪問して言ふのに兒玉大將は子爵に敍せられ、後藤民政長官は男爵に敍せられたから、祝宴會を催ふさうぢやないかと謀つた、スルと馬越は「ニ私が招待しませうと言つた、杉山は其れは至極宜からう就ては場所は何處だと尋ねると、馬越は瓢屋では如何

てせうと言うから、至極結構ですと答へ、相客は君一ツ撰定して呉れまいかと言はれたから、杉山は其れぢや伊東已代治、近藤廉平、加藤正義、大河内輝剛、後藤猛太郎並に拙者では如何てせうと推薦した、委細承知と馬越は早速其月の廿五日午後六時を期して其れ／＼招待狀を發したさうな。

◎さて愈々當日になると兒玉大將を正座に、招待を受けた面々ズラリと併んだ、先づ兒玉は馬越に向ひ私の父は茶人であつたと見えて、珍らしい茶幅が一軸秘藏してある、本日君に差上げたいと思ふて持つて來たと風呂敷の内から箱入の儘出した、スルと馬越は非常に喜んで此れは大將よりの下され物、恭平一門の光榮に存じますと、恭しく推戴さき先づ箱を賞め、次で蓋を明くると古代更紗に包んであるから、結構な服紗と嘆賞し、次には表装に感心し、愈々軸を披きかけたさうな。

◎兒玉は氣を利かして一寸紐を押へたが、馬越は恭しくソロリ／＼と披ひて文字を見ると叱驚してヤ、此れは大變だ……と俄に狼狽し巻かうとした、スルと兒玉は切角の珍品を手荒くして呉れては困ると取上げ、直に床の間に懸けたさうな。

◎馬越は此れは恐れ入つた／＼と頻りに頭へ手を上げ汗をタラ／＼流し始めたので、後藤、杉山などは可笑くて堪まらないが、事の仔細を知らない近藤、加藤、大河内などは不思議に思つて如何なる名幅かと床間へ手を突いて恭しく見ると『金五十圓也右林屋小さんへ御渡被下度候馬越恭平』とあるのでさでは腹を抱へて大笑ひしたさうな。

◎馬越は面喰つて汗許りダラ／＼流して恐れ入つて居る所へ、藝者は三寶に何か巻物を載せて目八分に恭々しく兒玉の前へ持つて來た、其れを兒玉は取つて聲高く讀上げるのを聞くに曰く『馬越恭平金子才覺うな。』

滑稽の惡戯

◎三井の朝吹英二が北海道に所有して居た炭山を炭鑛會社へ賣つて一儲遣つたところがある、スルト益田孝が之を聞込んで此奴一番朝吹に奢らして遣らう、併し君儲かつたから御馳走しろと言つては興がない、何か嶄新な工夫を凝らしてオヤ／＼と驚かさなければ面白くないと、種々考へたさうな。

◎其内に朝吹は鐘淵紡績會社の用向で神戸へ出張した、其處で益田は

好しく此不在中に甘く計畫して遣れと云つて、早速朝吹の名前で三井守之助、團琢磨、下條正雄、高橋義雄、益田克徳其外數名へ晚餐を饗應するから来る何日午後五時より築地瓢屋へ来て呉れと云ふ案内状を出した、其會日は何ても朝吹の神戸から歸る日であつたさうぢや。

◎斯くともしらぬ朝吹は用事を済して神戸を出立したが、汽車中に紙入を掏られて一文無しになつて仕舞つた、新橋へ着くと直に三井物産へ往つて此顛末を話した、益田はそりや氣の毒であつたが併し今晚一杯飲んで厄拂ひするサ、瓢屋へ往うぢやないかと勧めると、下地は好きなり御意は好し朝吹は二ツ返事で宜からうと言つたが、何やら合點の行かぬ顔付をして居たさうな。

◎其處で益田はドウしたのだと問ふと朝吹は何だか益田克徳から案内の斷り狀が僕の机の上にあつた、何の間違ひか不思議でならぬと言つた、スルト益田は腹にはシマツタと思ふたが素知らぬ風で其れは何かの間違ひだらう、好加減にして行こうぢやないかと、言ふより早く話頭を一寸他へ轉じて懸がて瓢屋へ出懸たさうな。

◎往つて見ると席上には三井、團、高橋、下條其他數名ゾロリと列んで居て、皆朝吹に今夕は誠に難有ふと禮を述べるから、何だか煙に巻かれた様な心持で、一體ドウしたのかと或一人に聞くと、君から案内狀が來たからだと言はれて、漸く何者かの惡戯と分つてギャフンとしたさうな。

◎其れから席上を見渡すと意味ありげに萩の餅四ツ宛饗され其上餘興として狂言の萩大名があつた、其譯は先年中村樓で痘痕會を催した時に、朝吹が『集れば一景色なり萩の花』の一句を贈つたのに因んだのぢやさうな、朝吹の顔は痘痕で有名だが、其遺方の皮肉なるには流石

の英二も啞然として驚いたさうな。

◎雄將の下に弱卒なして三井物産には却々悪戯者が居る、營業部長である磯村豊太郎が京城出張員小田柿捨次郎其他數名と紅葉館で大に飲んだとがある、美人の待遇で一同思はず飲過したが中にも小田柿は酔ふて斃れたさうな、スルト磯村は小田柿の眼鏡へソツト紙を貼つて置いたさうぢや。

◎時計を見ると午後十二時であるから一同歸らうとして小田柿を呼起したが、熟酔した者と見えて殆んど友人に引立てらるゝ様にして遂に車に乗つた、酔眼朦朧としてゲツプを吐きながら、暫くすると車夫に向て、ヤア大層雪が降つたなアと言つた、車夫は驚いて旦那御冗談仰しやつてはいけません、上天氣です、星様が溢れそうですと言ふと、小田柿はナニそんな事があるものか眞ッ白て銀世界ぢやないかとリキ

んで居る、車夫は思はず噴き出して旦那も酒ちうものは不思議でがすなアと、一本遣られて小田柿もヘンな事だと氣が附いて眼鏡を外して見た、スルト成程雪どころか上天氣だ、能く能く見ると眼鏡に紙が貼つてあつたので大に呆れたさうな。

### 骨董品の大滑稽

◎北畠治房が大阪控訴院長を罷て以來、大和法隆寺村に退隠して、古物などを愛玩して餘生を送つて居るが、此老人往年朝鮮の一大珍品を手に入れたと云ふので、早速大隈伯に之を贈つたさうな。

◎北畠が大隈に言ふのに天下に珍品多しと雖も我輩がさる道具屋で掘出した物ほど珍らしいのはあるまい、手放すは惜しいが、閣下に進上しやうと思つて持て來た、是れ見給へと言つて出すのを見ると、成る

程銅製の壺の様な又花活の様な古色蒼然とした實に珍らしい品であつたさうな。

◎大隈が言ふのに成る程之れは眞に珍品ぢや、多分七八百年前の朝鮮の花活であらう、不思議な面白い格好だ、ドレ床間へ飾つて見やう、ウム益々面白いな、誠に難有いと云つて深く禮を言ひ、其の後は痛く珍品として恭しく床の間に飾り、客ある毎に誇り顔に威張つて吹聴して居られたさうな。

◎偶々骨董屋徳田多助なる者一日大隈伯を訪ふたことがある、すると大隈伯は大得意になつて徳田に向ひドウだ近頃珍らしい物はあるか、僕が昨今手に入れた一大珍品がある、見せて遣らうか、ソレ床の間に在る品だ、と言はれて徳田は町重に手に取つて見ながら、御前之れは大變な物ですと言はせもあへず、大隈伯はそうだらう實に天下一品だ、

白く鹽の吹いた様に見えるのは面白いぢやないか、恐らく復とあるまゝいと非常な鼻息ださうな。

◎徳田は驚いた様な顔付をして御前ソんな譯のものぢやありませんと言ふと、大隈は愈々圖に乗つてお前も却々眼が高い、ナンと豪儀な物ぢやらうと得々として居らるる、スルと徳田は恐れ入つてドウ致しまして之れは飛んでもない品物です、床の間なんぞへ置くべき代物ぢや御座いませんと言つたさうな。

◎所て大隈伯も少々意外に感じて其れぢや一體何であるかと問ふと、徳田は聲を潜めて御前は途方もない代物で床の間に在ては實に恐れ入りますが、何處からお求めになつたのです、イヤナニ何處でも宜いがお前は何と鑑定したのだ、へい鑑定どころぢや御座いません、是れは朝鮮の婦人が使ふ便器です……と言はれて大隈伯も開いた口が



暫く塞がらなかつたさうな。

◎朝鮮や支那の婦人が使ふ便器は壺の様で而かも皆寢室の隅に置いてあるから、動もすると間違へらるゝとがある、日本橋の隣者田村光顯が先年滿洲を旅行した時に、鶏を手に入れたが之を煮る鍋が無い、其處で或民家の明屋を探したら壺の様な物があつた、此奴調資だと云ふので早速分捕して、能く洗ひ、其内て鶏肉を煮て喰つたさうな、後で聞いて見ると婦人の便器であつたさうぢや。

◎さて前の徳田多助に就て面白い話がある、彼れは大名屋敷などへ出入したものだ、殊に蜂須賀侯へ能く出入した、蜂須賀茂昭と云ふ人は以前は悪戯が好きで、徳田が伺つた時に同人の煙草入などを一寸隠してキヨロ／＼探がすのを面白がつて居られた、所て一日徳田は有名な書幅敷軸を携へて蜂須賀方へ往つたことがあるさうぢや。

◎徳田は御前此軸はどうです、彼の軸はどうですと披いて見せて居る内に、光琳の畫いた狐の一軸が見當らない、慥か持つて來た筈だがと獨語しつゝ頻りにキヨロ／＼探して居る、蜂須賀は其頓狂な風を見ながら可笑くて堪まらないが、我慢しながらオヤ多助どうしたのか、へイ一寸……へイ慥か持つて來たと思ひました軸が見當らないのでへイ

……  
◎蜂須賀が言ふのに一體何の軸だ、左様です光琳の狐の軸ですが……  
：フム成る程狐は早いから彼の額の裏へ隠れて居るのは多分其れだらう、徳田は早速手を延ばして取出して見ると光琳の一軸だ、又例の悪戯を遣られたと思つたから覺えずイヤドウモ『お家柄丈あつて恐れ入ります』と言つたさうな。

◎お家柄と云へば昔蜂須賀小六と云ふ泥棒があつたので蜂須賀侯はム

ツと怒り、此無禮者め！今後は出入差止め……と怒鳴りつゝ盥を蹴立て、奥へ往かれた、其儘多助は出入差止めになつたさうな。

茶席のシクジリ

◎茶席へ招かれて往々シクジルとがあるものだ、或日松浦伯の茶席へ三井八郎次郎、杉孫七郎、益田孝外數名が招待された折に水羊羹が出たさうな、スルト三井は健啖家ぢやからムニヤクと平けたが益田は半分で閉口して止めた、杉は喰ひ懸けて見たが逆も覺束ないので、コツソリ紙に包んで袂へ入れたさうな、懸がて御馳走も濟んだから杉は何喰はぬ顔して立ち上がると、水羊羹のとだから袂の中で溶けて其汁が袴へドロ／＼懸かつて居たさうぢや、茶席で此始末と來たから杉はイヤハヤ大弱りに弱はつたさうな。

◎其れから今一人の先生は其水羊羹を洋服の後のポケットへコツソリ入れて置たが、歸りにトンと忘れて其儘車へ乗つたから、サー堪らない、家へ歸つて見ればお尻がドロ／＼ぢや、妻君に大層小言を言はれて閉口したさうな。

◎淺田正文が先年日本郵船會社の重立數名を招いて茶會席の饗應を爲した時に、大河内輝剛は汁が如何にも甘いと云ふので五杯お代りを遣つたさうな、所が先生お茶のことは眞暗だから翌日友人に向て大得意に其事を話したさうだ、スルト其友人は兼て茶道を心得て居るから君ソリヤ大シクジリぢや、一體茶會席では汁でも何でもお客の數さへ拵はないものだ、其れを君が五杯もお代りやつては其度毎に新に拵へたのぢやと言はれで、流石の大河内もギャフン。

◎梅浦精一が茶の湯を始めたら猫に小判よりも尙ほ奇體だなど、悪口

を言つた者もあつたが、一日加藤正義、淺田正文等を招待したとある、茶室に充てられたる室へ入て見ると、文金の高島田に江戸橋模様の佳人が茶を點じた、加藤は其薦めらるゝのを遅しと待ち兼ねて、ヤオラ飲まんとするに、茶に香氣もなければ色も變てある、何だか氣味悪そうに一口銜むと異様な味で嘔み下すとは出來ない、非常に困つたさうな。

◎併し飲まずに返すとも出來ないから四苦八苦の末一窮策を案じ、其銜めるのを竊に茶腕の中へ吐き、過つて手を滑らしたる真似して茶碗を落したさうな、淺田は其れを見ると彼奴巧いとを遣つた、自分も持て餘して居るのだが好しく合點したと茶腕を落して兩人互に梅浦に其疎忽を詫びたさうな、所が精一は茶の撰擇を誤つたとを悟らないで、其後人に語て「加藤や淺田は茶人だなんぞと自慢して居るが、彼

の不始末は何事だ」と言つたさうな。

◎淺田正文は一日郵船會社の須田利信、大河内輝剛、春田源之丞、田中常徳等を茶の湯に招待したとがある、所が四人共茶道の心掛無いので大ひに閉口した、併し幸ひ相客某が茶道に通じて居ると云ふので、一同相携へて某を訪ひ種々相談に及んだ、スルト某は一計を案じて「好しく僕の遣る通りに遣り賜へ、何でも目に觸るゝもの口に味ふもの皆結構と賞讃すれば宜しい、其れに餘さないのが肝要だ、但だ僕は近頃胃病だから例外だ」と説いたさうな。

◎四人共是れは妙計だと手を拍て喜び其當日揃ふて淺田の宅へ往つた、指導者某が居るのを見て大に意を強ふした、應がて茶室へ導かるゝと某は先づ手洗鉢の傍へ寄り、手を洗つて後水を掌に受けて口を漱いだ、四人の者は其狀を視て水を飲むのだと心得、四人は交るゝ

水をグイ／＼飲んださうな。

◎更に茶室へ入て茶を薦めらるゝと、四人は豫ての教に従ひ「誠に結構」と讃辭を呈した、スルト淺田は「御意に召したれば……」とお代りを薦めた、四人は飲んでから又「結構」と賞讃したので淺田は直にお代りを薦めたさうな、斯くして薦めらるゝ儘に且つ飲んだが、愈々廣間に移つてお膳に座ると、四人は水と茶で腹を充たしてお膳に上る御馳走に箸を着くる勇氣がなかつたさうな。

◎併し残すのは失禮だと教へられたから大奮發を遣つて箸を執り「誠に結構」と苦し紛れながら賞讃した、スルト主人は直にお代りを強いた、四人は互に顔を見合して口には言はねど困つたなアと目配せたが詮術なくヤツと平げて泣聲交りに「結構」と賞むれば又お代り……最早ケの字も出なくなつて仰げば腹が脹つて苦し言はん方なく、去

りとして屈めば吐きさそうて堪まらない、漸く席終ると四人は初めて生きだ心地して挨拶もソコ／＼に門外へ飛出したさうな。

◎ヤレ嬉れしやとホット一息する途端に、飲んだものも喰つたものも残らず口から鼻から迸り出して門前小間物店の市が出来たさうな。

膏を絞られて得意なり

◎住友銀行前理事 田邊貞吉には随分珍談がある、春風駭蕩櫻花爛熳の好時節になつたから、墨堤の花見旁々上京しやうと云つて、大阪の梅田停車場へ出懸たさうな。

◎待合室へ入つて見ると知人二名が居て之れも同じく上京すると云ふので、互に同行を約し相携へて一等室に乗込んだ、スルト甲某は田邊に向つて「君はお供が無いのか、實に珍らしいナ」と云ふと、田邊は

膏を絞られて得意なり

笑ひながら「馬鹿言つちやア不可ない、何時だつて一人サ、見らるゝ通り誰も居ないぢやないか」と答へたさうな。

◎乙某透さず「何時も一人とは能く出来た、餘りシラを切ると素破抜くぜ、併し今日は實に珍らしい、天氣が變らなければ宜いが」と戯れ、三人互に相顧みて笑つて居たさうな。

◎其れから謠曲の話や世間話も種切れとなつて、徒然の餘り互に靴の内から新聞雑誌や小説などを取出して読み始めた、暫くして客車乗組の給仕が隣室から出て来て田邊に恭しく挨拶し「隣室のお連様が小説を一二冊お貸し下さいとの事で御座います」と言つたさうな。

◎田邊は此奴弱つたと思ふ途端に、彼の兩人が眼を圓くして「ナニお連様だ、ドンな人だ」と問へば給仕は何心なく「ハイ田邊様のお連様で御婦人のお方で……」と答へたから、兩人は鬼の首を取つた様な

氣持になつて、サア田邊、ドウだい、隠すより顯はるゝはなしだと詰寄つたさうな。

◎兩人退屈し始めたのも此一幕でハッキリ眼が開き、どれどれ證據物件を見て來やうと隣室を覗いて見ると、田邊が日頃鼻の下を長くして居る藝妓某が、懷中鏡を取出して頻りに兩頬を拭いて居たさうな。

◎兩人手を拍てしめたと叫びながら、田邊を擁して言ふのに一人旅に連れの、あるのは不思議だ、サア斯く現行犯を押へられては辯解の辭もあるまい、何を御馳走するか奢らなくては承知出来ないと責められて散々膏を絞られたさうな。

◎田邊は又或初夏の頃であつたが、大阪から上京するに北陸道を廻つて見たいと思ふて、兼て北陸の事情に精通せる郵船會社大阪支店長原田金之祐に相談した、原田は早速地圖を披いて詳細に旅行の順序を説

膏を絞られて得意なり

明し、名所古蹟、佳勝絶景は勿論、宿驛に於ける酒の香り餅の味迄講  
釋し、其上紹介状十數通を認めて田邊に與へたさうな。

◎田邊は其紹介状を見るに皆婦人の名宛であるから乙な事だと思ふ  
て居た、愈々出發して同夜某地に到着し、原田の指示せる旅館に投宿  
して直に添書を出した、女將受けて之を讀むに紹介者は郵船會社支店  
長、お客は元住友銀行理事であるから、珍客ござんなれと第一等の  
室に案内し優遇款待到らざるなく、流石の田邊も叱驚したさうな。

◎其れから翌日出發しやうとしたら、今日は何處迄御出になるかとて  
宿泊地を問ひ、其名指せる旅館其他へ電報で田邊の行くとを知らせて  
やつた、斯る事は少しも知らずに田邊は其地へ着くと旅館の女將番頭  
は勿論、同地有名の料理店主并に著名の藝妓迄が迎に出たさうな。

◎愈々旅館に投ずれば女將妓等田邊を圍繞めて一度咳をすれば吐月  
峰を拵げ、二度咳をすれば背を撫て、やり、口を動かせば煙草を薦め  
ると云ふ騒ぎ、其れはく搔い所へ手が届いたさうな。

◎斯様な鹽梅に到る所厚遇せられたので勢ひ拂ひが多くなり且つ茶代  
や祝儀も大に奮發せねばならぬ境遇となつて、意外に散財したので東  
京へ着いた頃は囊底殆んど空となつたさうな、所で田邊が斯く大持て  
に持てたのは全く原田金之祐が紹介状に非常な魂膽があつたので、後  
から田邊は人に向て原田も随分惡洒落をする男だと言つたさうな。

### 益田兄弟の火事珍談

◎益田孝は随分眞面目な男だが、併し裏面には意外な珍談もあるさう  
な、先年品川の大火の折に、三井物産から他へ廻り車夫を先へ歸して  
夜遅く品川御殿山の宅へ歸るふとすると火事があつて大騒ぎだ、益田

は己れの抱車夫の前を通ると車夫は居ないで老婆と女房がウロ／＼して泣いて居たさうな。

◎火焰が猛り狂ふて今にも其車夫の家へ燃え懸らんとするのを見て、益田は氣が氣でない、車夫の家では貸車を營じて居るので其處に二人乗の車が一臺あつたさうな、益田は其れを見附けてオイ、マゴ／＼して居ると焼け死ぬから此車へ乗れ、己れが挽いて遣るからと言つたさうな。

◎老婆は年老へて弱つて居るし、女房は病氣の揚句に此火事で驚いて腰を抜かしたと云ふ始末だから、益田は早く乗らぬかと叱つても、勿體ないと言つて手を合して拜んで居る、愚圖々々して居ると焼け死ぬと云つて無理無體に兩人を二人乗の車に乗せ、一生懸命で挽き出したさうな。

◎益田も生れて以來始めて人力車を挽いたのだから變なもので、其れに苦しくて堪まらない、町外れの植木屋の角へ来て、ヤット車を降し、其植木屋へ兩人を預けて一息吐いて宅へ歸つたさうな。

◎益田が人力車を挽いたと云へば珍談ぢやが、此老婆と病婦とを火の中から助けたのは實に千古の美談だ、此親切な心は即ち三井物産を盛んならしめ、日本の貿易に貢献した所以だと云つて心ある者は大に感心したさうな。

◎所で此夜弟の益田英作にも大珍談がある、英作は一寸變り者で火事は大好きと来て居る、孝の宅に居る時から態々鳶口と火事場服とを拵えて、平生寝る時に其れを枕元へ置いて、スワと云はゞ消防夫の如き扮装で直ぐ飛出す積りであつたさうな。

◎所が或夜風が吹き出し、何だか火事でもありさうな氣がして英作は

オチ／＼眠られない、髀肉の焔に堪へないと云ふ鹽梅で寢床へ這入つたが、兄の孝も未だ歸らぬから現々して居た、スルト鐘がチャン／＼と鳴り出したさうな。

◎英作矢庭に跳ね起きスワ御參なれと直に用意の服裝に飛口を小脇に抱へ、掛聲勇ましく駈出したさうな、素人の宅へ飛び込んで手傳つても面白くない、好し兼て鼠負の老妓お丸の宅へ往つて片付けて遣らうと思つて、早速お丸の宅へ飛込んださうな。

◎ヤイお丸、此扮装は似合ふかドウだと、眞逆洒落込みもしまいが、オイ何か持出して遣らうと言つたら、ハイ何卒此大切の行李一ツお願ひしますと差出した、英作よし來たと言ひながら肩に擔いでサツサと孝の宅へ歸らうとしたさうな。

◎重い物を擔いだとの無い英作だから御殿山へ差懸る頃は疲れて這々の體で上つて往つたさうな、孝の門へ入ると向ふから巡査が角燈を照してゴツ／＼遣つて來た、巡査は此奇體な男を見てオイ何處へ往くのかと誰何した、益田孝の宅へ往くのだと答へた、スルト巡査は虚言へ今頃行李を擔いて益田の宅へ往く者はあるものか、此奴ウロンナ奴だ警察署へ來いと言つたさうな。

◎流石の英作も是れには驚いた、ナニ御冗談を仰しやつては困りますぜ、私は益田英作でげすと言つたら、巡査は虚言へ、益田英作は其んな風を爲す男ぢやないぞと叱り飛ばしたさうな、英作愈々窮して虚ぢやありません、能く私の顔を御覽なさいと言つて頭巾を脱いださうな巡査は角燈揚げて能く見ると成程益田英作なので、巡公「ヤ是れは失敬でした」



御門違ひの大滑稽

◎益田孝の弟益田英作が或夏自分の姉婿である海軍中將瓜生外吉の家を訪ふたことがある、其頃瓜生は今と同じく根岸の里に住んで居たが、少將に任ぜられたので同番地の隣家に轉居した併し別段知らせなかつたさうな。

◎英作は神ならぬ身の夢にも知らないから日中車を急がせて玄關へ着くや否や案内もなく、ツカ／＼客間へ通つて、暑い暑いと言ひながら帯を解き、衣服を脱ぎ真裸になつて廿三貫目の身體を座敷の真中に大の字形に投げ出して『ヤア誰か居ないか、水を持って来い』と怒鳴つたさうな。

◎其聲に下女は何事ならんと駈附けて往つたが、此有様に叱驚仰天キヤツと言つて腰を抜かしたので、今度は書生が駈附けて餘りの意外に驚きながら『足下は誰某て御座る』と問ふた、スルト英作は目を開いて『フ、ム君は新參の書生ぢやなア、君は未だ僕を知るまい』と言つて平氣で居たさうぢや。

◎此時當家の細君が聲を聞き附けて出て來ると、英作は下女と間違ひ、ジロ／＼見廻しながら『ハ、ア少將に御昇進で下女までが御立派になりましたナ』と冷かしたので、妻君も呆れ返つて居る所へ、當家の主人が立ち出て、『君は瓜生さんと當家を御門違ひはなされませぬか』と言つた、スルト流石の英作も驚いてムックと跳ね置き、是れはシマツタ申譯ないと言ふより早く帯と衣服を引掛け、眞平御免の一聲を残して平蠅蛛の如く逃げ出したさうな。

◎其れから隣の瓜生家へ往つて恐る／＼尋ねる様「一寸承りますか

此方は瓜生少將の御宅に相違御座いませんか、丸て葵に懲りて脛を吹く格を遣つたさうな。

◎第百銀行の池田謙三にも面白いシクジリがある、何でも久振にて友人鈴木利亨を番町の宅に訪ふた、玄關で「大將在宅か」と言ふと年齢四十格好の男が袴のひだを直しながら「誰某様で御座りますか」と問ふた、池田は心の内で鈴木も近頃大分威張る哩と思つて「池田謙三が来たと言つて呉れ」と無造作に言つたさうな。

◎取次の者は委細畏つて其儘引退り、再び出て来て「此方へ」と言つて座敷へ案内した、見ると床の間には文晁の山水などがいかめしく掲つて居て、置物さへ見馴れぬ珍品が飾つてある、池田も「ハテナ大將餘程妙に變つて来たぞ」と心の内に可笑しく思ふて居たさうな。

◎暫くして現はれ出たのは鈴木でなくて香水の匂ひめてたき貴公子である、池田は「又しても前座を出しよるか」とお臍で茶を沸しながら挨拶もソコソコに済ますと、貴公子は恭しく一禮して「私が東園侍從で御座る、始めて御目に懸ります」と言はれたので、池田は吃驚始めて戸惑ひせるに心付き、頭を搔きながら「ヤ、之れは失禮致しました實は鈴木利亨を尋ねて参つた譯で」と詫びると、東園も微笑みて「何さま鈴木と云ふ人は以前此家に住はれたが、疾くに他へ轉宅されたさうです」と語るにぞ、流石の池田も愈々赤面して呆然立ち端を失つたさうな。

### 學者のシクジリ話

◎北海道拓殖銀行頭取美濃部俊吉が先年獨逸伯林で法學博士高根義人と共に市中を散歩して居る内、小便が出たくて堪へられぬのでコッソ

リやらかした、スルト巡査に見附けられて大層叱られたが、美濃部は獨逸語を知らない振して一言も發せなかつた、高根は百方辯解したけれども查公却々聞入れない遂に胡麻化すのが出来ないのて美濃部はヒラアママリにアママツタさうな。

◎内務省監獄事務官小河滋次郎が伯林で或る宴會へ招かれて食事の最中ナブキンを落した、人知れず之を拾ふとして手をソツト伸ばし、上から引張つた、スルト隣席のお嬢さんが眞赤な顔してモジクして居るから、此奴變だと思つて下を覗いて見ると、コハ如何にナブキンと思つて引張つたのがお嬢さんの裾であつたさうな。

◎温順な小河の事であるから大層面目ないと思つて其れからは萬事マゴつて折角の御馳走も甘くない、ポイーがコツプに葡萄酒を注うとしたら、イヤモ一澤山ですと言つて辭退した、所がそれは自分のコツ

プてはなくて隣席のお嬢さんのコツプであつたさうな。

◎貴族院議員男爵吉川重吉が獨逸留學中伯林で宮中立食の饗應にまねかれたから、シルクハットで意氣揚々と出懸けた、廳がて食事が始まると先生何と間違つたかバタを山の様に皿に盛つて來た其れを見附けた西洋人はクスリクスリと笑つて居たさうな。

◎法學博士岡野敬次郎は獨逸留學中伯林で監獄署長スタルケに招かれて御馳走になつたが、食事前には頗る談話をして居たが、イザ食事となると黙つて仕舞つた、西洋では食事中談話をするが禮となつて居るから其處で隣席のお嬢さんが話を仕懸け様と思つて居るけれど餘り黙つて居るので、貴下ドウかなさいましたかと尋ねた、スルト岡野は日本では食事中饒舌るとは禁物であると答へたさうな。

◎法學博士岡田朝太郎同福田徳三とが佛國郵船に乗つた時に、福田が

誤つて佛國婦人の裾を踏んだ、スルと意地の悪い婦人て謝罪らなけりや聴かぬと力味で居る、福田は謝罪らないと云つて居る、岡田は福田に向つて「君馬鹿野郎と言つて一寸下を向き賜へ」と言つた、依て其通り下に向つて馬鹿野郎と言つたら佛國婦人は日本語で謝罪つたものと思つて喜んで去つたさうな。

◎法學博士高橋作衛は英國ケンブリッジ大學に在學中寫眞を研究したが、或時宿の家族一同を集めて撮影をやつた、意外に能く出来たので先生大得意である、翌日宿の亭主が一寸來て呉れいと言つたから必定寫眞を譽めらるゝのだと思つて往つた、スルと案外にも寫眞の藥で床を汚して困るから宿替をして呉れろといふ談判であつたさうな。

◎法科大學教授勝本勘三郎が佛國巴里でサンクルーへ行ふと思つて電氣鐵道に乗つた、先生の考では黙つて此車の内に居れば獨りてサンクルーへ着くと思つて平氣で済して居たのぢや、稍暫くして自分一人となつたから何だか變だと思ふて窓の外を見ると、其車は倉庫の中へ仕舞はれる所であつたさうな。

◎法學博士桑田熊藏が伯林からライプチヒへ往うとする汽車中林檎十數顆を買ひ之を袋に入れて客車室の上の網へ載せて置いた、懸て喰べようと思ふて袋の口へ手をかけると、一ツ飛び出して下に居る婦人の肩にあつた、此れはシマツタと思ふて御免下さいと詫て拾ふとする、又一ツ上から落ちて御免下さいを言はせもあへずバタ／＼と皆落ちて婦人の身體の中つたさうな、スルト桑田は大弱りに弱つて謝罪つたさうな。

◎法學博士中村進午が獨逸ハイデルベルヒに居つたとき二ヶ月程湯に入らなかつた、スルト法學博士小野塚喜平治、同山田三良の兩人は大

層冷やかした、其處へ醫學博士大澤岳太郎が遣つて来て、ナニニ僕は三年半経つたが未だ入浴せぬと言つたので、一同眼を圓くして驚いたさうな。

◎中村が塊地利維納に滞在中藤浪岡村兩醫學博士幸田幸子其他數名と集つて鼻息で蠟燭の消し競べを遣つたさうな、幸田嬢丈けは幾ら勧めても遣らなかつたが、宿の主婦は平氣で鼻息で消したさうな。

### 大ハイカラの今昔

◎日本郵船會社倫敦支店長根岸練次郎は熱心なる英國通のハイカラにて、動もすると我英國と言ふ位な男だ、所が始めて倫敦へ往つた頃には英國の風俗は珍らしくて不思議に感ずると頗る多いので、倫敦滞在中の莊田平五郎に向て種々質問したとがあるさうな。

◎先づ根岸の最も奇異に感じたのは晚餐の時に倫敦の紳士が皆常服を脱いで盛装を凝らす一事である、男子は燕尾服を着、婦人はドレスを着ると云ふ有様、一體どう云ふ譯かと莊田に聞いてみると其答が面白、「仕事服を着換へて立派になつて食事をすれば心持が能くて甘いからだらう」

◎其れから又倫敦の紳士は皆毎朝自分で顔を剃つて何時も顔が奇麗なものにも根岸は感心した、其處で莊田に向て何故男の癖に顔を飾るのだらうと尋ねたら、莊田は例の調子で顔を剃れば氣分が宜いからだらうと冷やかに答へたさうな。

◎莊田に一々質問した根岸が今では倫敦通で先年澁澤榮一が洋行した時に隨行員の一人、萩原源太郎が關羽の如き美髯を誇りつゝ倫敦へ着くと根岸が早速尋ねて來た、萩原は大に喜んで明日から案内して呉れ

ろと頼んだら根岸は應じないのみか、其髻はドウしたのぢや、髻の中から顔を出して居る様なものだ、そんな野蠻人の顔では市中の案内が出来無いと刎付たさうな。

◎萩原は餘り意外なので驚いた、併し此髻は大切な髻で歴史もあるし其れにカラの汚れも見えないし、又襟飾も見えないから度々取換る必要もない、中々経済的であると辯疏したけれども根岸は倫敦狂と云ふ程の英國の心酔者ぢやから何條以て聞入るべき、案内しない所か白晝外出して貰ひたく無いと迄斬込んださうな。

◎成る程倫敦の紳士は毎日髻を剃る習慣で、髻を生やして（八字髻は別ぢやが）人に逢ふを無禮として居るから萩原の如く北海道のアイヌ宜しくと云ふ様な髻ムシヤでは困るだらう、午後の七時頃から十時過迄根岸は剃れと云ふ、萩原は剃らぬと言ふ、傍に居た者も惜いものだ

からナーと言ッて俄に剃るとに賛成は出来ない、結局仲裁説が出て髻の髻を短かく刈込むとに妥協したさうな。

◎根岸が先年歸朝した時に或集會席で英國の風俗談をやつたが、人を訪問するに顔を剃らないで、自然の儘に生やして居るのは失禮だ、先達歸京の途次大阪で藤田傳三郎の園遊會に臨んだが、シルクハットの紳士が、顔の掃除をして來ないのには、實に驚いたと物語つたさうな。

◎根岸が言ふのに英國では人の前で痰を吐くの甚だ失禮としてあるから、僕は英國人の痰や唾を吐いたのは見たとが無い、其れから洋食の後に壺深い硝子に水を入れて出すが、日本では彼れて口を嗽ぐ人がある、大變な間違で彼れは指先を濡らして髻や唇を拭く丈けに使ふのぢやと語つたさうな。

◎倫敦ではフロクコートを着れば必ず高帽と定つて居る其れから

黒のズボン（チツクワイ）は葬儀（ソウギ）に限るさうな、又襟飾（チツクワイ）は燕尾服（マンピ）の時には白で、葬儀の外は黒を用ゐないさうだ、日本では堂々たる紳士（シンシ）が平常黒の襟飾（チツクワイ）を用ゐて居るが、英人が見たら葬儀（ソウギ）に臨んだ歸りだと思ふだらうよ、尤も黒でもダイヤモンドか何かのピン（ピン）を飾りに付けて置けば差支ないさうな。

◎日本（ニッポン）に在る蝶形（テウケイ）の襟飾（チツクワイ）は倫敦には全く無い、同地では皆長いのを結んで下げる分のみぢやさうな、其れから園遊會（エンユウカイ）などでは極めて派手な襟飾（チツクワイ）を用ゐ、平常も割合に派手なものを付けて而かも毎日の如く取換へるさうな。

◎根岸練次郎は斯様にハイカラ一通ぢやが、最初倫敦へ往つた頃は随分失敗したともある、或日黒の襟飾（チツクワイ）を付けて郵船會社支店へ出勤した所が、同店の或英人は根岸に向て貴下は今日何方の葬儀へ御臨みてしたかと尋ねた、根岸はへんに思ふてナニ何處の葬儀へも往かない、何故其んな事を聞くのかと問返したら、「デモ貴下の襟飾は黒だから」……

◎根岸は或夜倫敦の地獄町であるチカテリ一街から夜遅く歸ると四邊は寂として聲なく電燈の光の外人影見えぬに、突然後から頭を擲ぐる者がある、練次郎驚きながら是れ曲者（クセモノ）容赦はならぬと飛附けば曲者は逸早く時計の鎖に手を懸けて、時計をモギ取つて逃出せうとする、其れを押へんとする途端に、又横合から雲突く男が飛出て練次郎の頬をポカ／＼と擲つたさうな。

◎根岸は其處で我は日本男兒なり汝等如きに負くるものかはと怒鳴て二人を對手に組附いたが、ドタバタする内一人は練次郎の時計の鎖をも奪つて逃げて仕舞た、併し一人丈はトウトウ押へて警察署迄連れて

往つたさうな。

◎此曲者は倫敦の掏兒であるが、西洋の掏兒は日本の掏兒と異つて突然頭を擲つたりピストルを向けたりして奪ひ取るのである、誠に不手際な話で丸で強盗同様だ、所で根岸は二人の大の男と奮闘して一人を警察署迄連れて往つたので其剛膽と勇氣とは西洋人も舌を捲いて感心したさうな。

◎ハイカラの根岸が斯様な活劇を演じたといへば不思議に思ふ者もあるが、彼れは固と越後長岡の人傑河井繼之進の甥で、河井の血を幾分か受けた男である、だからイザと云ふ場合には却々の剛の者で世のべラ／＼ハイカラとは雲泥の差があるさうぢや。

◎所が根岸は奮闘の結果勝利を得たが、翌朝起て見ると頭から顔から膨れて殊に額や頬は紫色になつて居る、外へ出るにも甚だ工合が悪、と云つて缺勤する譯にもゆかぬ、儘よ出勤しろと咳やき乍ら出て往くと、支店では皆不審に思ふて、根岸君ドウしたのかと言つて交々尋ねる、根岸も前夜掏兒と奮闘した迄は宜かつたが、遭難の場所と時刻にはグットと參つた、と云ふものは其場所を午前一時頃通る者は地獄買ひより外はないからださうな。

### 維新豪傑の素破抜き

◎明治維新當時の豪傑には随分面白い珍談がある、是れ迄世の中へ餘り知れて居らぬ珍談を話して見やう。

◎故人となつた上野景範が景助と云つた時代に全權公使となつて出發する際、横濱で送別會を催した、伊藤、大山、野津（今の野津大將の實兄故鎮雄）後藤、西郷（從道）始め當時のバリ／＼連が皆揃ふて出



席したが、酒酣なる頃鹿見島の某が酔ふて二階から落ちて氣絶したさうな。

◎スルト後藤象二郎は氣絶した時には香水を鼻から注ぐと蘇生ると言つて、藝妓お倉(富貴樓)の鏡臺の前に在つた香水の瓶を持出して、其男の鼻から注ぎ込んださうな。

◎大野津、小野津と云つて評判男ぢやつたが、兄の野津鎮雄の足は非常に大きいので靴は馬鹿々々しい程大きかつたさうだ、そいつを其晩何人かゞ間違へて穿いて往つた、餘の靴は皆小さくつて穿けないから、野津は仕方がなしに裸足で歸つたさうな、横濱から汽車で東京迄

◎其れから大山巖の外套を故山澤中將が間違へて着て行つて翌日御所へ出勤しやうと思つて、門まで行て外套の隠しから門鑑を出して見る

と、大山の名前の門鑑が入つて居るので、臆を潰して引返したさうな。

◎同じ晩の事だが西郷従道は大に酔うて歸りには汽車の中で丸て寝て仕舞つた、汽車が新橋へ着いても知らずにグー／＼寝て居たが、驛夫に呼び起されてやう／＼目を醒して歸つたさうだ、所が陸軍の徽章の附いた帽子を汽車の中に忘れて翌日出勤に困つたさうな。

◎横濱の富貴樓のお倉と云つたら今の元老連も頭が上らぬ程の剛の者だが、彼れの元老評は一寸面白い、木戸孝允を評して言うのに、「木戸さんは能く何にても氣の附く好い方でしたよ、妾達を呼んぢやア好きな物を御馳走して遊ばして呉れて、自分も寝轉んで話なんぞをするのが嗜まされた、お酒に些と酔つて來ると歌を唄うのが嗜まされて、殊に都々逸が上手でした、其れに歌を作るとも上手でした、一體木戸さんは

口に出しちやア決して言はないで、能く親切に人の世話をして呉れる方て……其れに氣性が強くて見た所から大身な立派な方てした」

◎お倉が西郷隆盛を評して言うのに、「大西郷さんは酒を飲てあられる様な方てなく、お酒を飲みながら、餘り饒もせずホツ／＼ホツ／＼ツて笑つて許りお居てなさるの……小松帶刀さんと御一緒に御入來になつたり、又河瀬眞孝、村田新八、高島鞆之助さんなどと御一緒にしたが大西郷さんは一番ダンマリでした」

◎其れからお倉の伊藤、井上の批評を聞くに「伊藤さんは淡泊な方て、物を頼んだつて何人の頼みだから骨折つてやらうと云ふ様な考は無、頼まれた時にはウム可しく／＼と言つて居ても、其次には悉皆忘れて仕舞ふ様な人なんですよ、そこへ行くと井上さんは親切で、殿様斯う云ふ譯なんてすから何卒斯うして下さいッて頼んで、ウム可し

と一旦言つたからには、ソリヤ根限り何でもして下さる、眞個に五月蠅くなる程世話して下さるんですよ」

◎尙お倉が言うのに「だから妾は伊藤さんに向つて井上さんは頼んだとは眞個に能く覚えて居て親切だけれども、御前は直き忘れてしまつて不實ツたらないよ……と言つてやつたら「お前が不實だと言はうが言うまいが、お前等の言うとなんぞ覚えて居て、天下の事が出来るものかッ」と笑つて居るんですよ」

◎お倉尙ほ言うのに「其代り伊藤さんは腹の中ツたらソリヤ奇麗ですネ、妾の知つて居るお役人の中で町人が來ちや一生懸命にコチヨ／＼話をして居るのを聴かないのは、伊藤さんに西郷さんに山縣さん丈てすよ、他のお役人は何人だか知らないが、始終來ちやゴチヨ／＼／＼ドウせ碌な話ぢやないやネ」

◎伊藤は慾が薄いので人に物を呉れるとなどを何とも思はない、李鴻章から貰つた玉の井をお倉に呉れた話を聞くに、お倉が伊藤の宅へ御機嫌伺ひに行つたら床の間に立派な玉の井があるから「御前ソリヤ何處から貰つたの……こりや李鴻章が呉れたんだ……妾に下さいな……ウム持つて行け」と云ふ様な鹽梅で、お倉は今でも大切に持つて居るさうな。

◎桂太郎も福島安正も元は山縣の書生で、お倉なんどは福島の記事を「何だ福島は坊主」なんて云つたのが、先年西比利亞の遠征旅行で、世間から大持てに持てた頃、福島は富貴樓へ往つて「女將家に居るか」と言ふと、ソレ福島中佐が來たと云うので女中から料理人迄大騒ぎすると、お倉は平氣の平左で「一寸お前さん此頃は大騒ぎネ」と言つたら、福島は「ン」と笑つて居たさうな。

◎山縣夫人が死んで葬式の時に、桂も福島も棺側に附いて歩いたのは昔の關係からだ、所で桂が總理大臣になつてから、お倉は訪ふて歸來人に語つて言うのに、ドウも總理大臣と云ふ様な心持がしない、此頃は何だか政府が小さくなつた様な心持がすると語つたさうな。

◎芳川顯正が初めて文部大臣になつた時分に、お倉が元老連と遊んで居る所へ來たから「大臣の雛妓が來た〜」と言つたさうだ、其譯は丁度藝者の雛妓が姐さん株になつた様なものだから……

### 感違ひの失敗

◎感違ひの失敗は固と輕卒から起るので、不注意の結果ではあるが、併し罪が無くて随分面白いのがある、今僕が思ひ出したニツ三ツを話して見やう。

◎前住友銀行理事田邊貞吉が攝津寶塚温泉へ往つた時に同附近の有名な禪宗の寺へ詣つたことがある、山門から入りて庫裡を眺め本堂に詣つて其れから内庭へ入らんとしたら、茶坊主が「其方へお出てやすと和上さんのお居間どすからイケまへん」と答めたさうな。

◎田邊は不審な顔して「ハ、阿嬢さんのお居間……當寺の住職は近代の名僧だと聞いたが女兒がある様では大黒が居るに相違ない、矢張賣僧だと憤慨して戻つた、大阪へ歸つたら右禪寺の住職の話が出ると田邊は凡僧に過ぎないと冷やかして居たさうな。

◎併し誰も田邊の説を信じないから、後再び寶塚温泉へ遊んだ時に此疑を確かめやうと思ふて、同禪寺へ復往つて前回通り本堂から内庭へ入ろうとしたら、茶坊主が「和上さんの居間どすから」と言つて止めた、田邊は其處で阿嬢さんとは誰の事かと尋ねた、スルト「和上さん

と云ふのは當山の御住職で大和尚さんの事です」と答へた、田邊和上を阿嬢と感違ひしたとが分つて思はず頭を掻いたさうな。

◎市原盛宏が横濱から上京して歸る際、新橋停車場で一夫人が破顔一笑足早に進み近づいて「お久うぶ御座います」と言つた、市原は確かに見覚えある婦人だが何人であるかは思ひ出さない、百方考へた末大阪南新地の某旗亭の女將であると氣が付いて、「ヤ、暫くだな、ドウして東京へ來たネ」と問ふたら婦人は變な顔付をして「ハイ先年こちらへ参りました儘で」と答へたさうな。

◎市原は「其れぢや餘程前に來たんだネ、ドウだい一家達者かネ」と尋ねた、婦人は愈々妙な顔して「ハイお陰様で子供達も皆達者で御座います」と答へた、其れから又市原は「フム結構だ、今日は何處へ行くんだネ横濱か、其れぢや久振で晚餐でもやらうか」と言ふと婦人

は「有難ふ御座います、何れ其内宅へ伺ひましやうが、何分長谷川が亡くなつてからは何方へも御無沙汰しまして……」と言つたさうぢや。

◎スルト市原はドウも始めから應對が眞面目で待合の女將としては平仄が合はないと想ふて居たが、長谷川と一言聞くと忽ち故長谷川一彦（第一銀行横濱支店長）の未亡人であることが分つて、流石の市原も感違ひとは云へ、言語態度迄無禮であつたことが恥かしく散々に詫言つたさうな。

◎白岩龍平が支那から歸つて來て一日友人湯河元臣を訪問しやうと思ふて本所へ出懸けた、偶々横網町に湯河寛吉の門前を通つて其姓のみを見て元臣の家だと想ひ、直に支關に到りて名刺を出した、寛吉は嘗て白岩と面識あるから早速座敷へ通した、逢つて見ると元臣で無いから白岩はヒヤリとしたが今更間違へましたとも言へない、差向話に困つたが寒暄の挨拶も濟むと白岩は寛吉が遞信省參事官として貯金の事に精通して居るのを想ひ出し、清國に貯金制度を設くるの方法に就て二三の間に合はせの質問をやつて、細目の調査は何れ宜しく頼むと言つて歸つたさうな。

◎其れから數日を経て白岩は坂谷芳郎を大藏省に訪問しやうと思ふて、同省の受付に取次を頼もふとすると、傍に芳郎が居るのに心付きて『近日清國へ歸るとになりましたから、御暇乞に出ましたが先日願て置いたとは何分宜しく……』と言ふと先方では「イヤ先日は失禮しました、御依頼の事は早速取調に掛りましたが、何分込み入つた數字の事ですから、ドウも手間が取れまして……何れ其内に清國の方へ送ります」と答へたさうな。

◎白岩はハテナ數字に關係ある調査を阪谷に頼んだとは無いが、其返答が腑に落ちないので能く／＼其人を見ると奚ぞ圖らん先日失策した湯川寛吉であつたさうな、湯川の容姿は聊か坂谷に似て居るから白岩は重ねて失敗したので、自分ながら笑止て堪まらない、遂に坂谷をも訪はないて倉皇歸つたさうな。

滑稽なる奇行

◎海外でのシクヂリ話は愛嬌あつて至極面白いが、其失敗談中で最も有名なのは、佐々友房が巴里の料理屋で葡萄酒を飲ふと思ふたが、佛語で葡萄酒を何と云ふか分らないから、種々考へた末フト葡萄酒の國を思出し、葡萄酒の下へ牙の字を加へてホルトガルと讀ませるから葡萄酒はホルトであらふと思ふて早速ボーイにホルトを呉れろと言つた、ボ

ーイは何の事だ少しも分らないで大滑稽を演じたさうな。

◎其れから又佐々友房はインペリアリズム（帝國主義）の事を頻りにアンペラズムと演説したので、大笑ひとなつたさうぢや、丁度松本重太郎がクレジツト（信用）の事をソレジツトと言つて大層笑はれたのと好一對だ。

◎松平正直は聖路易萬國博覽會副總裁と云ふので、聖路易では一寸外國通を氣取つて居たが、先生往々巴里へ往つた時に、或紳士の許へ招待せられて御馳走になつたことがある、其際隣席に同家の令嬢か席を占めた、松平は食事半ばで前へ掛けて居るナフキンを落した、此奴シマツタと思ふて人の知れないやうに兩足でソツト持上げながら手に取り、ナニ喰はぬ顔してペロリと口を拭いた、スルト隣席のお嬢さんがモヂ／＼して眞赤な顔をした、ハツト氣が着いて見るとナフキンと思

つたのは其の嬢さんの裾であつたさうな。

◎西園寺公望侯が佛國留學中は却々の活潑で貴族に珍らしい程の豪放であつたさうな。一日珈琲店へ遊びに往くと一人の女中が誤つて珈琲茶碗を壊した、スルト亭主が非常に立腹して下女を散々に叱り飛ばした、西園寺侯は見兼ねて其下女を呼び寄せ、珈琲茶碗の代金さへ辨償すれば宜いのであらふと言つた、女中は大きにソウですと答へたので、侯は好しと言ひつゝ、五百法の紙幣を投付けて亭主へ渡し、之れは珈琲茶碗と之れから壊す物の代だと云つて店前の硝子障子をメチャクに壊して悠然立去つたさうな。

◎法學博士梅謙次郎は巴里で美人の多い或料理屋へ遊びに出懸けたとがある、日本で云へば待合の様な所であつたが、先生頗る持てないのて不平で堪まらない、畢竟日本の學生は金が無いと思ふて冷遇するのや。

### 陸奥宗光女の追剝に遭ふ

◎西南戦争の際に東京から出發する官軍は皆横濱から船に乗つた、其れゆへ横濱は大繁昌で、富貴樓なんぞは役人が毎日多勢出たり入つたりして宛然事務所の様であつた、其中に陸奥宗光が捕縛される様な話がある、チヨイ／＼洩れて端なくも藝妓お倉の耳に入つたさうな。

◎當時お倉と陸奥とはお互にワル通して仲が好かつたからお倉は此奴大變だと思ふて、或朝早く陸奥の雉子橋の宅へ訪ふた、スルト陸奥は

何しに來たと尋ねるから、お倉は言ふのに「實は誰とはなしに、貴下の噂が此頃甚く悪い、若し縛られてもして業を晒した日には私ア氣が揉めてならないから、何卒今の内に腹切て下さい」と言つたさうな。

◎スルと陸奥は「可し／＼己れは其様なことはありやせんから安心して歸れッ」と言つたさうだ、お倉は何だか危いとは思つたが、其儘歸ると、翌日陸奥は捕縛されたさうぢや、其れから直に宮城の監獄へ送られて仕舞つた、お倉は早速二尋ばかりもある長手紙を書いて「斯う云ふとを聞くのが厭やだから過日も態々上がつてお話をしたんで、それをあなたが私の言つたやうに切腹をしないもんだから、こんな耻をかか様になつたのだ、彼の時に能くさう言つて呉れたツて今ぢやあなたも思つて居るだらう」と云つてやつたさうな。

◎陸奥が宮城の監獄へ送られてからは、老母と夫人とは寂しい詫住ひ

をして居たが、或年の暮、大掃除をすると云ふので夫人は左の手に箆を持ち、右に紙塵を持つて障子を叩いて居ると、「電報ッ」て持つて來た、夫人は請取らうとして見ると陸奥からの電報だから吃驚して、長男の廣吉を呼んで、廣さんお父さんの所から電信が來たヨ、こりやモウ吃度お父さんが死んだと書いてあるに違ひない、私アそれを見て奥にお居での老母さんの所へ持つて往つて見せるのが厭やだから、私ア手に取れないと言つたさうな。

◎廣吉はお母さんそんなどを言つたつて、脚夫が待つて居るぢやありませんかと言ふと、夫人はデモ私ア厭やだからお前請取て見てお呉れと言はれたので、廣吉が請受て披いて見るとアッお父さんは歸つて來ますよツと言つた、スルと夫人はエツと言つたさうな、實に人情の極微を穿つ紙塵も抛出して二時間餘も泣いて居たさうな、實に人情の極微を穿つ



たものぢや。

◎其後お倉は陸奥の歸つたのを悦びに往つた時に、夫人は「お倉私ア電信が來た時には手に取るとが出來なかつたよ、旦那様が死んだと訖度書いてあるに相違ない、其れを老母さんに話すのが大變だと思つて、胸がドキ／＼した時に、お父さんが歸つて來ますツと言はれたものだから、餘り嬉しくして私ア腰が抜けて老母さんの所へ知らせに行くとも出來なかつたよ」と語つたさうな。

◎此話を聽くと流石のお倉も嘸ぞさうだつたらうと思つて涙を溢したさうぢや。ホンとに芝居にでもある様な話だ、其れから數年経て陸奥が漸次昇進して大臣になつた時に、お倉は伊藤博文に附いて箱根の温泉へ行つたら、偶然陸奥に逢つたので、陸奥は伊藤に向つて此のお倉と云ふ奴は剛氣な奴だと言つた、スルとお倉はナゼですと聞いたら、

陸奥はお前は己れに腹を切れなと言ひやがつたと言ふと、お倉は當然サ、縛られて耻を搔いちや態が悪るいからサと言つたさうな。

◎陸奥は「けれどもお倉、彼の時に己が腹を切らなかつたから、斯して居るんぢやないか」と言つた、スルとお倉はさう言へばそんなものサ、だからあなた大盡響應をなさいよツ、けれども食物なんかは詰らないからチツとお金を掛けて羽織でも拵へて下さいと強請つたら、陸奥は可しく拵へてやる、併しお前は彼の時に能くさう言つて呉れた」と言つて遂に六十金を投じて上等の羽織を拵へて與へたさうな。

◎其後陸奥はお倉に逢う毎に箱根の山で女の追劔に逢はうとは思はなかつたと言つたさうな。

圍碁珍談

◎實業家中て碁の強いのは大谷嘉兵衛（方圓社の三段）、木村利右衛門（同二段）、田中市兵衛、若尾逸平、大谷幸兵衛（共に初段）なんぞだらうよ、大谷兄弟が共に強いのは一寸面白い、併し弟の嘉兵衛は何でも兄優りだが、此男の碁は洒落を澤山交へて動もすると口で勝つとがあるさうな。

◎木村利右衛門は店の番頭手代等に悪遊びをさせない様にと思ふて、碁盤を二三面買ふて頻に圍碁を稽古させた、自分も其仲間に加はつて戦つたが、店の連中は主人の出馬には毎度恐れ入つて中では難有迷惑に思つたものも少なくなかつたさうぢや、若尾幾造も木村の故智を學んで店の者に圍碁を稽古させたとがあるさうな。

◎前島密、牟田口元學、森村市左衛門、阿部泰藏なんぞも一寸打つが、御自慢程には往かぬ、亂島は中々負けるとが嫌ひだから近頃は餘り打たないさうだ、誰も負けるとを好きな者もないが井上馨と來ては又有名な負惜みの強い男だ、碁の戦が愈々酬となつて、勝敗將に分れんとすると、先生鼻息荒くなつて終には「待つた、待たぬ」の懸聲と共に忽ち兩將の一騎打となつて恰も謙信が河中で信玄を撃つの有様を演ずるとがあるさうな。

◎其處で妻君が見兼て「マアあなたが御無理と」仲裁に横鎗を入れると、井上は大喝一聲「何を貴様が」と怒鳴て忽ち肝癪玉が破裂するのて、據なく主客の奮闘に任すさうな、結局井上が負けると幾度も戦を挑んで止まない、飯時を過ぐるもいつかな臆部も命じないから、如何なる客でも遂には空腹に堪へないので負けて了ふ、之れが先生得意の兵糧攻ぢやさうな。

◎信州の前長者議員色部義太夫も非常な負け嫌ひで、偶々書生など

が往つて手ひどく先生に勝たうものなら機嫌が甚だ悪くて、飯時でも飯を出さない、其代り負けて遣ると早速「君は酒を遣るか」と來ると受合ぢやさうな。

◎碁に負けても勝ても平氣なのは伊藤と大隈ぢやさうな、殊に大隈と來ては負けた時に頭へ手を擧げ、莞爾としてイヤハヤ美事な敗北ぢやと笑ふので勝た方も氣持が宜いさうだ。

◎圍碁の名人岩崎健造と死んだ水谷銀次郎との間に面白い話がある、兩人共五段であつた時に、或日午後一時から打ち始めた、百目に達しない内水谷の打つた一目が非常に名手であつた、スルト岩崎は頻りに考へ出して容易に打たない、一時間経ても二時間経ても打たない。

◎水谷は閉口して晚餐を喰ひに出懸けた、歸つて來ても岩崎は未だ考へて居る、據なく水谷は湯に入て來た、其れでも打たない、依て思

切て寄席へ住て夜十時過に歸て來たが、未だ岩崎は頻りに考へて居てサツパリ打たない、十二時になつても打たないから明日にしようと言て水谷は寢て仕舞つた、スルト後て岩崎は其碁を壊したので同人の負となつたさうな。

◎大隈の邸で岩村定高(初段)と相良剛造と碁を打つたところがある、相良は岩村より遙かに弱い、所が傍て見て居た兒島惟謙は前に岩村と打つて負けた腹癒せに相良に助言して大層岩村を苦しめた、スルト岩村は非常に立腹して兒島の頭を擲つた、兒島は自分が悪るいと思つたから其場を避けやうとしたら岩村は飛附て又一つ擲つた、其處で兒島も立腹して其場の大立廻りを始めたが、主人の大隈夫婦が仲裁して漸く中直りをさせたさうな。

◎其れから晚餐の時に兩人は互に顔見合せて頭を搔きながら「年甲斐

も無いとをしたのう」と言つて此事は互に他言しまひと云ふ約束をした、所が岩村の妻君は翌朝襟首の搔きむしりを見付けて、大方昨夜何處かの待合で藝妓に引つ搔かれたんでせうと極め付けられた、流石の岩村も大弱りに弱つてとう／＼約束を破つて秘密を白状したさうな。

◎之に似た話は國分青厓と磯野徳三郎と一生懸命に碁を打つて居ると、桂湖村が側から頻りに磯野の助言をする、青厓は怒つて黙れと大喝したが、中々止めないので青厓の勘忍袋の緒が切れて、湖村の頭へ鐵拳を喰はした、湖村は驚て立關迄懸出したが、間もなく又テリ／＼傍へ寄つて助言を始めた、青厓又怒つて擲らうとすると逃げ出したが、此時湖村の獨言が面白い、詩人などと云ふ者はアンなに腹を立て、はいかない、今の詩人は局量きよくりやうが狭くて困ると言つたさうな。

粗忽な話

◎實業家中で粗疎そそかしい男は恐らく朝吹英二の右に出るものは無からふ、能く物を忘れて紛失まごししたり、或は他人の下駄げたを穿き違ひたり、其れは／＼は随分滑稽ずいぶんこつげいなどがある、何でも或日三井重役室サウイウキョウシツから外出しやうと思ふて階上かいじやうより降りて車に乗ろうとしたが、慌あはたしく自分の事務室しつへ戻つて来て頻りに眼鏡めがねを探して居たさうな。

◎慥たじか机の上に置いたと思ふたのが薩張見當らないから、給仕きよしで百方探がさせた、けれども更に無い、氣短きみじかな朝吹のとてあ愈々怒鳴り立て、貴様達一體氣が利かない目の代理する位の士たを注意して居らないと云ふとはあるものか……などと云つてい給仕を叱り飛ばしたさうな。

◎給仕はフト見上ぐると朝吹の左の手に何か持つて居る物がある、ドウやら眼鏡らしいから恐る／＼旦那御手にも持ちなされるのは何て御座いますか……と問はれて朝吹氣が附いて見れば眼鏡であつて、ドウモ面目ない次第だが其處は朝吹だ「馬鹿!!!何故早く言はなかつた」

◎是れも粗々ツかしい一ツであるが、佐竹作太郎が三井三菱、正金、住友の諸銀行員を甲州御嶽に案内した時に、一同甲府の望仙閣に泊つて、翌曉早起して仕度をするると川島忠之助の羽織が無い、女中などは大に心配して百方探索したが見當らない、已むなく佐竹が同家に預けて置いた羽織を取出して川島に貸したさうな。

◎所て一行將に出發せんとするに臨み頭數が一人足りない、指名點呼を遣つて見ると三井銀行の佐藤定次郎が居ない、慥か前夜枕を併べて寝た筈だが、不思議でならない、便所ではあるまいかなどと噂して居

る所へ、突然戻つて來た、能く見ると川島の羽織を着て居たさうな。

◎佐藤は戻つて來るや羽織を取上げられ、其上一同から「抜け駈の一乗、組敷ける敵のお名前承りたし」と擲擧はれ、「一同寢に就てからタツタ一人紛失したるは是れ如何に」と責められ、佐藤は「羽織隠して袖引止めて……」と鼻歌謠ふて歸り來りし元氣も何處へやら消へて仕舞つたさうな。

◎東京株式取引所重役并に仲買人などが同じく甲州御嶽の探勝會を催した時に、甲府柳町の佐渡幸へ泊つた、三階の一室に伊藤幹一、渡邊亨、藤田英次郎、木村源兵衛が枕を并べて寢たが、木村は夜半便所に往つて自室へ歸ろうとして忽ち戸惑し、二階の一室へ飛込んで美髯の紳士が寢て居るに吃驚し慌て、三階へ上つて自分の寢床と思ふて夜着を引くと渡邊の寢床であつたさうな。

◎先年横濱で内外人打混じて一大園遊會を催したとがある。其際今は故人である第一銀行横濱支店長長谷川一彦が時の三井銀行横濱支店長矢田績に向ひ荆妻を紹介しやうと言つて一婦人を連れて來た、矢田は一面識ある顔附ゆる此奴紅裙隊中の一人ならんと、其名前を考へたが思ひ出さない、突然「貴様は見たとのある奴ぢやが、何と云ふ名ぢやつたかなア」と、婦人其の意外なる無禮に驚き、長谷川又頻りに辨解し、先年長谷川の宅で面會した顛末を話したので、矢田面目玉を潰し、イヤハヤ飛んだ疎忽であつたと平詫りに詫つたさうな。

、酷評にシクジル

◎馬越恭平には随分珍談が多いが、先年會禰荒助の大藏大臣時代に、會禰から相州片瀨の別荘に招かれたことがある、馬越は何かお土産に陽氣な趣向をと考へて清元梅吉と新橋の絃妓數名を携へて、出懸けたさうな。

◎汽車へ乗込むと一令夫人が子供を携えて乗つて居た、馬越は何人か少しも知らないが、梅吉等は豫て御最負に預かつて居るものと見えて町寧に挨拶した、馬越は例に依て熾に氣焰を吐て梅吉や絃妓を吹き飛ばす勢であつたさうな。

◎話が偶々片瀨の噺に移つて、片瀨には誰々の別荘がある、其の別荘は實に奇麗だなどと、話に枝が生へると馬越は反身になつて「會禰の別荘だなんと云つたツてマルキリ豚小屋同然だ」と氣焰愈々中るべからざる勢だ、絃妓等驚いて目附て何か知らせる様になり、梅吉は又殊更咳嗽をして注意する様な風をやつたが馬越は少しも分らなかつたさうな。

◎馬越は更に言葉を續けて「大臣なんと云つても金が無くては氣の毒なものだ、別莊を持つ位ならモ一少し立派にしたら宜ささうなものだ、何んば會禰が無頓着の人だと云つても、彼の別莊ではヒド過ぎる」と益々鼻息が荒らくなつて來たさうな。

◎汽車が藤澤へ着くや江ノ島行の電車に乗換へて片瀬へ向つた、間もなく電車が片瀬へ着くと先きの令夫人は倉皇下車した、スルと一妓遊に馬越へ告げて言ふのに「今お降りになつた奥様は會禰さんの奥さんですよ」と注意したさうな。

◎馬越叱驚して色を變へ「ナニ會禰さんの奥さんだ、ヤツ此奴大にシクシッター」と自分ながら呆れた、併し最早取消することも出来ない、ドウして恢復しやうかと千々に心を碎いたさうな。

◎梅吉始め妓女等も大に心配して飛んだ事になつた、定めし會禰さんの奥さんは御立腹なすつたであらう、折角のお招きも汽車中で打ち壊しになつて仕舞つた、其れにしても馬越さんは如何して甘く斬抜けなさるか、互に顔見合せて居たさうな。

◎流石は馬越だ、斯る失敗の時には機先を制するに若かずと決心して、會禰の別莊に入つて主人に面會するや、直に汽車中の失策を懺悔して「奥さんの御いでとは知らず飛んだ酷評をやツつけました」と詫びたさうな。

◎會根は磊落な男だから少しも意に介せない様で、カラ／＼と笑つて居た、馬越稍安心したが、暫くして囊に汽車中で逢ふた令夫人が盛装して席へ現はれ、恭しく馬越に一楫して「誠に豚小屋同様な所へ態々御招き申まして御氣の毒様で御座います、差上げます物もホンの豚の餌食同様な物で、お口には合ひますまいが御緩りと遊ばしまして」

と言はれさうな。

◎此一言に馬越もギヤフンと参つて「へい／＼是れは恐れ入ります：  
……」と繰返すのみで、何と答へ様もなく殆んど穴へも入りたき心地  
であつたさうな。

### 未知の人と相乗り

◎東京瓦斯會社商務課長であつた河井芳太郎が一日澁澤榮一の王子の  
園遊會から歸る時に、門の外からフイと道連れになつた男がある、  
脊の高い瘦せた顔の色の白い髯の茶色な男である、一寸西洋人かとも  
思はるゝ様で其容子は學者らしくも見へたさうな。

◎其男は河井に向て今日の園遊會は實に盛會でしたナ」と互に當日の  
光景など弗々語り合ふて王子の停車場へ着いたから河井は其男に向  
て、何方へお歸りですかと問ふたら東京へと答へた、其れぢや汽車も御  
一所だ、一等ですか二等ですかと聞くと何方でも宜しふ御座いますと  
答へた、河井は切符を買はうとすると、一等も二等も満員だと断はら  
れたから已むを得ず三等を二枚買つて一枚を其男に渡したさうな。

◎三等列車は込み合ひながらも彼處此處で種々な珍談を喋舌つて居る  
ので、一入興味がある、河井は偶然の道連れなる其男に向て今日は口  
曜て天氣も宜いから近郊への散歩連は澤山出ましたなア、夫婦手を携  
へて悠々歩いて居るのも随分見受けますが日本も大分開けて來ました  
よ……と言ふと其男は恰も待ち構へしかの如く、お説の通り十年  
前は愚か六七年前迄は夫婦共に散歩する様な文明的の行動を執る人物  
は實に少なかつたですと言つたさうな。

◎其れから談は家庭に移つて、日本の多數は眞の家庭を造つて居らな



い、夫は妻を家の留守役と心得て、交際場裏へ出さないのは勿論、都會の金持とか有力家とかになると、自分の家で食事するところが少ない、家族團樂の樂みなんぞは棚へ上げて居る様だ、其だしきに至ては女房を酷使するのを以て世間態が宜しい様に誤解して居るものもある……なんぞと語り合ふたが、符節を合した様に同意見であつたさうな。

◎更に進んで女房優待論となり、ハイカラの神髓説となり、乗車時間の短かさを啣つ程にて、上野停車場へ着くや否や河井は其男に向ひ、何處へお歸ですかと尋ねた、スルと其男は番町へと答へ、且言ふのに君は何處へと問返したから、牛込ですと答へた、然らば九段迄御一所に参りませうと言つたさうな。

◎其處で河井は其男と共に上野停車場を出ると二人乗の車が居つて、頻りに乗れと勧める、其男は相乗は互に話が出来て面白い、君如何ですかと言ふから、河井は是れも一興だと思ふて早速快諾し、直に相乗でテク〜曳かせたさうな。

◎車上で又前回の續きなる家庭談が出た、其男は言ふのに僕は平素非常に多忙で、妻と緩々話す時間が少ないから、日曜には相乗で外へ出て車上で種々の話をするのが、何よりの樂みとして居ると言つたさうな、河井も其説が我意を得たる如く歓迎し、互に車上で肝膽相照らしたさうな。

◎併し河井は熱ら〜考へるのに、汽車賃を拂つて遣つたり相乗車にも乗りながら名乗らぬのは變などだ、一體何者であらうかと氣が附いて見ると頗る笑止しくなつて來て自分ながら妙な男も世の中にあるものだと思ふて居たさうな。

◎愈々車が九段へ着いて互に降りたが車賃は復た河井が拂ふとになつた、其男は別段半額出さうとも云はない、汽車賃も車賃も皆河井に拂はせながら格別禮も言はずに、別れやうとしたから、河井は堪へ兼ねて一體君の姓名はと問ふたら、大學教授法學博士松波仁一郎と答へたさうな。

香奠に釣銭なし

◎益田英作は随分一風變つた男で、金を出すことは頗る嫌ひだ、三井物産會社の理事であつた故上田安三郎の娘が縁附くと云ふので、祝儀を遣らねばならぬハメになつたが、單獨でやると奮發せねばならぬ關係だから、實兄孝と一所にやつた方が得策だと云つて、品川御殿山の宅を訪うて五圓紙幣を投げ出し、何卒宜しくと胡麻化して一口乗つたさうな。

さうな。

◎其後矢野二郎が死ぬと英作は早速弔ひに往つたが、氣に懸るのは香奠だ、幾許出したら宜からうかと頻りに煩悶しつゝ葬儀係の所へ往つて、先づ香奠帳を見た、五十圓、百圓、千圓と云ふ口が多いので、英作吃驚しながら「エライものでゲスな」を繰返して居る内、フト金五百圓也益田孝、同榮子、同太郎と書いてあるのを發見したさうな。

◎スルと係員に向つて君一寸筆を貸して呉れ給へと云ふから、ドゥするのですかと尋ねたら、「此の同太郎の傍へ同英作と一筆は如何でゲせう」と言つた、會計主任郷隆三郎は拒んで言ふのに、其れはいけません、之れは最早収入済です、貴下は別に出して下さいと刎付けたさうな。

◎英作は益田孝の香奠の内へ一口乗ろうとしたが、外れたので、此奴シクシクッ、何處かに金高の少ない標準はあるまいかと、セッセと探したが、自分の地位に比べると、比較になる格安のものが見當らない、大に弱つて蚤取眼で探して居る内、フト発見したのは早川千吉郎の五圓と云ふのであつたさうな。

◎英作手を拍つて喜んで曰く「三井銀行の番頭さんが五圓でゲす、拙者は三圓と云ふ相場でゲせうナ」と、俄に懐から紙入を取り出し青圓紙幣を探した、所が生憎一枚も無い、五圓札も無い、残らず拾圓札許りだ、此奴シマツタワイと思つて儘よ五圓奮發！やうと覺悟したが、香奠に釣を呉れるも不體裁だ、好し隣室に澤山人が居るようだから取換へて貰はうと思つて出かけた、其途端に紙入から何か紙片を落したさうな。

◎英作の氣附かぬ内に、傍に居た大田黒重五郎が機敏に一寸其紙片を足で踏んで知らぬ顔して居た、英作が隣室へ往つた留守に一同集つて其紙片を披げて見ると待合の書き付と思ひの外、三井銀行の七千五百圓の預り證である、此奴面白いと早速隠すことになつた。英作は隣室で拾圓紙幣の兩替を頼んだが誰も持合せ無いと言つて應ずる者が無かつたので、已むなく立戻つて香奠五圓ハツムから釣を呉れ給へと言ふや、郷隆三郎は香奠に釣錢を出した先例を聞かない、英作さん拾圓御奮發なすつた方がお徳ですぜと乙に言つた、スルと皆何だかクス／＼笑つて居たさうな。

◎英作は變だと氣が附いて紙入を見ると七千五百圓の預證が無い、ヤ是れは落したのを拾つて隠したに相違ないと思つて、オイ冗戯ぢやゴワせん、出し給へと言ふや、一同何か大切な物でも紛失なさいまし

たか、誰も知りませんとシラを切つて居る、英作躍起となつて此悪人共には困る、早く出せ〜と迫るから、一同はお疑ひならポケットを御覽なさいと言つて居たさうな。

◎何と言つても預證を出しそつても無いから、英作大に怒つて、宜しい勝手になさい……と怒鳴り散らして出懸けた、車を呼んで歸り懸けても誰も止める者は無い、乗懸けた船だと思ふて車に乗つて廣尾の坂を上つても追驅けて來る者が無い、此奴折角怒つた政略も外れたと覺つて又引返して來たさうな。

◎今度は態度一變して優しく、實は彼の書類は本日取引上是非必要なのだから返して呉れ給へ、其代り香奠をモ一貳圓五十錢奮發して十ニ圓五十錢出すから……と只管詫びるが如く言ふので、一同氣の毒になり、其れは多分渡邊亭が持つて居る筈だと或者が言ふと、流石は渡邊だ、ポケットから其場て出しては悪者になるから、冗戯言つちや困ります、其れは靈前に上つて居ますと言ひつゝ、別室へ往つてツツとポケットから出して持つて來たさうな。

### 新婚物語 (其一)

◎妙齡の處女が兩親より縁談の事を話さるゝ程嬉れしい様を恥かしい様なものはなからふ、だから答は總て消極的に裏面から言ふさうだ、阿部泰藏が十八歳になる愛女に、日頃チヨイ〜出入する某氏に縁付けんと思ひ、或時晩酌の傍に呼び寄せ、嬢や某さんは誠に親切な善い方だがお嫁に行くとはどふぢやと尋ねたら「彼の方なら私だつて悪くなくツてよ」ど答へたさうな。實に可愛らしい返答だが處女の心意氣は大抵コンナものだらふよ。

◎婦人許りかと思ふと男子でも裏面から惚氣を言ふのが多い、矢野二郎が新婚後の訪問者に夫婦の間柄を問ふのが癖ださうぢや、故波多野傳三郎が新婚後訪問したら矢野が言ふのに「妻君はドウだい」と問ふた、スルト其波多野の答が面白い、「妻は私には背くまいと思ひます」と答へた、其れから又大岡育造が新婚後矢野を訪ふて例の質問に逢ふたから「妻は私を信用して居ります」と答へた、其處で矢野が人に語て言ふのに兩人とも妻は私に惚れて居りますと言ふのぢやが、裏面から能くも婉曲に言つたものと評したさうな。

◎矢野は實に札附の氣焰家だが、益田孝(夫人は矢野の妹)の弟英作が結婚した通知をせず子が出来たと云ふので英作の宅へ往つた時に、細君と知りながら彼女は何處の人かへと詰問したので英作も大に閉口したさうな。

◎矢野の實兄富永冬樹は却々の奇人て一種の快男見てあつたが、其子の敏磨と云ふは丸て親とは反對で、大學通ひも遣つた位ぢやのに、普通の書生と違つて内氣な溫和の男で、寫真道樂の外は別に何の嗜好もなく、品行と來ては學生中稀有との評判であつたさうな、所が先生安場保和の令嬢を何處かでチラと見染てからは、書物は勿論眞器械も手に附かず、一室に閉ぢ籠つて痛く鬱いて居るので兩親も大心配、さては嫁でも娶て遣つたらと親心に、彼處の令嬢此處の娘と鞠むるも一向耳にも入れず、高野山へ入つて坊主になりたいなんぞとスネるので、更に合點が行かず、百方手に手を盡して敏磨の心の中へ探りを入れたさうな。

◎其結果「安場さんのお嬢さんならては」と云ふとが分つたので、人を以て安場へ申込み數回交渉の末漸く纏まつたさうな、敏磨の喜びは聲

ふるに物なく、早速新婚旅行と洒落込んだ、おち行く先きは鎌倉で、鴛鴦の交り睦じく毎日、寫真器械を携へて逗子から横須賀まで出懸た、所が横須賀海岸の要塞地で一生命に撮影中巡査が「コラ其所は軍事上撮影嚴禁の場所ぢや」と怒鳴りつゝ、宿所姓名を訊問したる上寫真器械附屬品一切を取押へて一應放還したさうな。

◎翌日になると巡査は敏磨の滞在せる鎌倉の別荘へ尋ね来て、前日取押へた寫真器械から附屬品一切を返し、ニッコリ笑つて去つたさうな、何故巡査が笑つたかと能く聞て見ると、寫真二十枚程撮影してあつたが、場所こそ變れ何れも皆細君を撮影してあつたのぢやさうな。

### 新婚物語 (其二)

◎法學博士中村進午は諸方から結婚を勧められて、種々な候補者出た

が本人サツ張乘氣にならない、媒酌人は何でも條件が餘程面倒ぢやらうと思つて居た、所がさる友人が子爵三島彌太郎の妹を勧めて見ると、先づ宜からうと云ふ話ぢやから、其れなら早速遣るべしだと云ふので三月二十七日に話が始つて同卅一日に結婚した、何でも四月は花の縁で縁起が悪いからと云ふのぢやが、其れにしても五日間に萬事決行して仕舞つたのは先づ珍らしい方だらうよ。

◎外交官補日下部三九郎は明治卅四年十二月十七日朝江副廉の娘と結婚して、其日の午後直ぐ露國モスコへ出發赴任したなんども、先づ珍らしい話ぢや。

◎先年小松宮殿下が英國皇帝戴冠式に參列する爲め出發なされた時に隨行員中に結婚後間もない者が三人あつたのは面白いテ、醫學博士土肥慶藏は三井元之助の妹と結婚して丁度一ヶ月目ぢやさうな、其れか

ら海軍少尉子爵田村丕顯は結婚後三週間目で、又東京朝日新聞記者法學士村井啓太郎は新婚後僅か四日目ぢやさうな。

◎シテ見ると村井啓太郎は一番可愛ぢや、何でも村井は其月の四日に日本銀行理事首藤諒の娘と結婚したが、其時は下宿屋住ひだから、家を探がす内首藤の宅に居るとして、意氣揚々新婚旅行に出懸たさうな、話換て朝日新聞では兼て出願して居た英國皇帝戴冠式へ社員を派遣するところが許可になつて七日に軍艦淺間號へ乗船を命ぜられた。

◎新聞社では種々評議の末村井を派遣することに定めて其手紙を濟した所が肝腎の本人が一向御存知ないので、何處に居るかさへ分らないと云ふ始末だ、首藤の宅へ人を遣つて聞いて見れば新婚旅行中だと云ふとぢや、彼是れする内村井が歸つて來たから事の次第を話すと、本人も意外に感じたけれども詮方ないから直ぐ出發の準備に取懸つたさうな。

◎村井の胸中では結婚後四日目に立つのぢやから生木裂く様な心地したらふが、戴冠式済むと直ぐ歸る積りて、立つ日から早や歸る日を指折數へて居た、所が小松宮殿下の侍従から「朝日新聞社にて差支無くば村井を式後歐洲各國巡回の隨行を命ず」と云ふ内命が來た、新聞社では大喜びて早速御受したが村井の腹の中では「オヤ〜」

### 新聞記者の大椿事

◎大阪朝日新聞の小川定明は五十餘歳の老記者ぢやけれど元氣無類だ、日清戦争の際従軍記者として支那へ赴いた時に他の新聞記者は嘲笑して云ふのに、彼の老ボレに何が出来るものか、朝日老ひとりなどと冷かした、所が中々大膽で機敏で他の記者の往けな危険な所へ往

き、人の出来ない事をズン／＼遣るので、参謀官なんどの氣受も至て宜しく、何でも蚊でも小川でなくてはならない様になつて來たさうな。

◎小川は非常の働きがあつたので歸朝すると新聞社から慰勞金千圓を貰つたさうだ、スルト兼て大阪の料理屋に借があるから返す積りて、凱旋祝宴を兼京都へ赴いて一切仕拂するから皆請取に來いと知らせ遣り、自分は南北新地の藝妓十二三名引連れて京都木屋町に陣を構へ、祇園町や先斗町からも紅裙を招いて飲めや騒げの豪遊を連日續けたさうな。

◎大阪の料理屋は拂ひが取れると云ふのぢやから鼻うごめかして京都へ出懸た、中には女中なんぞが『それ御覽小川さんは見所があるさかいに、妾はお貸申しても宜いと言つたのや』なんかんと威張るもあれば、ソウぢや尤もぢやと相槌打つもあり、京都へ往つて見れば小川は紀文大盡も斯くやと思ふ許りの豪遊、藝妓の祝儀のみでも大變なもの、皆驚く程であつた所が彼れ是れする内小川は何時の間にか見えなくなつて仕舞つたさうな。

◎スルト掛取に出懸た連中は大心配を始めた、京都市内を隈なく探しても居らないと云ふので、仕方なく掛金處が小川の豪遊した尻拭ひをして歸ると云ふ始末ぢやさうな、小川は千圓を懐にするとヤレ金時計、ヤレ金の指輪、ヤレ金の煙管と買込だ上、着物も羽織も袴も贅澤な物を拵へ、一寸飲みに往つても五圓遣る所を十圓遣ると云ふ始末だから忽ち囊中寂しくなつたので、據なく京都を外して名古屋へ往つたさうな。

◎名古屋では可なりの豪遊を試みたが、金時計や金煙管が捲上げられたので、仕方なく東京へ落ち延び友人から金策をして瓢然日光へ遊び



に出懸けたさうな、サー是れからが非常に面白いのぢや。

◎日光の或旅館で風呂場の歸りに座敷を間違へて、とある室へ遁入ると二十歳前後とも思しき窈窕たる美人が火鉢に向て居る容子は得も言はれない、流石の小川も茫然としたが、美人透さず、退屈で困りますから一寸お話をささいと勧めたから、飛び立つ思ひて然らば御免と辭儀して話込んだが、ドウ見ても良家の淑女が病後の保養に來て居るとしか見えなない、ツイ話が長くなつて晚餐も一つに喫べたが、其淑女は翌日歸る時に小川に向て宇都宮の自宅へ歸りに是非寄て呉れろと堅く約束して歸つたさうな。

◎其處で小川は日光もソコ／＼にして引上げ、宇都宮美人の宅へ尋て見ると、別荘か隠居屋敷とも云ふべき小綺麗な家に、老婆一人を使ふて居るから、此奴面白い所だと思つて、美人の云ふが儘に泊つて居る

内、魚心あれば水心でツイ睦まじい仲となつて仕舞たさうな。

◎スルト或夜寢室へ踏み込んで寢首を押へた者がある、小川は叱驚して勿ね起ると、其處動くな此姦通者めと怒鳴たさうだ、併し流石は小川だ、サー罹つた是非に及ばないと度胸を据へ、兩手を附いて頭を壁に附け主人誠に申譯ない、夫ある婦人とは露知らず不義を働きた段面目次第もない、實は私事山梨縣南巨摩郡大川村々長某と申、村費を私消したると發覺して入獄する所を、幸ふじて此處迄通れて來りしもの、ドウセ罪人の身の上殺すとも活かすとも御存分の處置を願ふと訴へたさうな。

◎兼て巧みし綱に宜き獲物が罹つたと思ひの外、罪人の身の上と聞きし俠客の胸の内、シマツたりとは氣が附たが、さあらぬ體にて汝の如き阿呆者を殺して見ても仕方がない、其着て居る衣類から携帶品悉く

此處へ出せと言つた、其處で小川もホット一息早速丸裸となつてブルブル慄えて居たさうな。

◎スルト其美人たる妻も見兼ねて腐つた様な單衣一枚呉たさうふぢや、小川は難有謹んで頂戴し、其れから俠客に向て言ふ様、某天地に愧入る不義を働きながら兎や角御願申は慚愧千萬ぢやが昔から俠客は人の難を助け急に赴くと水火も辭せずと聞て居るが、某今や實に死地に陥つたもの、哀れ一片の俠氣を揮てお助け下さる譯には行くまいか、さすれば御恩は決して死すとも忘れませぬと両手を突て泣入る許りに頼んださうな。

◎俠客は黙つて居つたが妻は見兼ねて、ソレ彼の旭町の料理屋から男が一人欲しいと言つて來たぢやありませんか、彼處へ世話して遣つちや如何てしやうと云ふので、ソーさ宜からふ、チャ己れの後へ附いて來

いと言つて小川を其料理屋の下男に入れたさうな。

◎そこで小川は料理屋の下男となつてからは、ジャンプ掃除から雑巾がけをするやら、水を汲むやら風呂を沸すやら一生懸命に働いた、其れに能く氣が附て掻い所へ手の届く様だから女將始め料理番から下女迄氣に入つたさうな、小川も好加減な名前で猫被つて居たが、其實一日も早く東京へ歸りたくて堪まらない、併し本名知れては大變ぢやから、百方苦心して先づ戀意な家を作り、東京の友人へ身の上の顛末を知らせて其處へ友人から衣類を送つて貰ひ、マー好かつたと思ふて遣を取るとを言い出した、スルト女將はお前の様に字も讀めたり能く氣が附て働く男は無ひ、給料も上げて遣るから是非辛棒して居て呉れると言つたさうな、小川は陰で舌をペロリ。

◎有名なる新聞記者とは神ならぬ女將の知る山もなく、下男として使

ツて居たとは虫の好い話ぢやが、知らぬは佛、使はれた小川定明の心の中如何であつたらうか、漸くのとて暇を取り尻に帆かけて東京へ歸つたとは實に小説的ぢや。

### 善は急げ

◎豊川良平が能く友人の周旋を爲すには皆感心して居る、女房の世話から借金の始末迄尻拭ひしてやるので、渠の爲めに救はれた男は澤山ある、だから世間一般の實業家に較べては割合に貧乏して居る、併し此處等が義侠的人物の面目が見えて渠の價値かも知れない。

◎渠が最も激賞する人物は大石正巳と仙石貢だ、兩人に就て頗る親切に世話を焼て居るらしい、其れに仙石の妻は豊川が媒酌したのぢやさうだが、其結婚に就ては珍談がある、渠は工科大学を卒業した時は成

績も能いし、其れに人物はシツかりして居るから、諸方より縁談を申込むもの澤山ある、けれども却々承知しない、母は有名な賢母で陰ながら前途の事など種々心配して内々豊川に向ひ、倅貢は誰の言ふとも聽かないが貴下の言ふとなら大抵聽くから、何卒結婚すると丈け得心さして貰ひたいものだ頼んだ、スルと良平心得たりと早速受合つたさうな。

◎其れから豊川は仙石に向て熱心に勸告したので漸く結婚する方針丈は決定した、併し別に候補者がある譯でもない、けれども名にし負ふ豊川の事だから斯く方針が決した以上は一日も猶豫するものでない、恰も好し川田小一郎の家に和田の娘を行儀見習旁預つて居るので、彼れなら才色兼備だ、仙石には過ぎる位であるが、併し後には昇進する男だから實に良縁だと獨り合點して、先づ此事を仙石に告げたさ

うな。

◎所で仙石の答が面白い、何でも宜いから説明も何も入らない、一切君に任すと答へた、けれども外の事と違ふから一度見てはドウだ、ナニ見逢などは面倒臭い、ウムそれならセメて寫真丈けても見ちやドウだ、其れにも及ばぬ一切悉く君に任す……と云つた様な工合で流石の豊川も實は意外に感じた位であつたさうな。

◎それから豊川は其足で直ぐ川田の所へ驅附けて小一郎に向ひ君は未だ逢つたとはあるまいが、僕の親友に仙石貢と云ふ者がある、彼の男は一廉の人物ぢやが、ナンと足下が預つて居る和田の娘を嫁に呉れまいかと申込んだ、スルと川田は言ふのに仙石の人物は他から評判を聞いて窃に感服して居る、自分に娘があれば直に遣りたい位だ、僕は實に大賛成だ、併し彼れの親戚に一應相談する必要があるから、早速話

さう、善は急げだ是れから直に出懸ようと言つて其儘飛出したさうな。

◎斯ふ云ふ鹽梅に縁談が始まつてから三日目に確定して直に結婚を取換はしたさうな、世の中に此位迅速な結婚は先づ少からふ、豊川は親切な男丈あつて縁談の周旋を能くやる、山本達雄、故吉武誠一郎、由井大佐なんどの妻は皆渠が媒酌したのぢや、其外未だ澤山あると云ふとだ、加藤高明へ岩崎彌太郎の娘を呉れたのも豊川が世話ぢやさうな。

◎加藤高明の結婚前に一椿事がある、渠は品行方正の評判高いので殊の外三菱家に信用あつたのに、縁談の定る間もなく渠が新宿で女郎買ひしたと云ふ噂が立つた、岩崎家では窃に心配し始めた、ては加藤が猫を被つて居るのか知らんと云つて、内々調査したら宜からうと云ふ者もあつた、或忠義の男が密に新宿方面を探偵したら女郎屋の帳面に

加藤高明と書いてあつたさうな。

◎所で不審に堪まらぬのは花街へ遊ぶ者は誰でも名前を匿くして偽名を遣ふのに、レイ、くしく本名を書くのは可笑いと云ふので、能くく調べて見ると同姓の加藤正義が遊びに往つた時悪戯半分に加藤高明と書いたと云ふ事が漸く判明して、芽出度三菱のお智さんになつたのださうな。

### 歓迎の裏面

◎前日本勸業銀行副總裁藤島正健が先年南米智利へ硝石取調の爲め渡航したが、出發する時には旅費は不充分だから大に儉約旅行を遣る決心で、智利へ到着したならば小さいさな下宿屋に泊り込んで居ようと云ふ積りであつたさうな。

◎だから桑港へ着くと、下宿屋籠城の準備として米、味噌、醬油、罐詰類を澤山買ひ込んで飄然智利へ乗り込んだ、所で先生農商務省の囑托をも帯ひて居たので、硝石取調の爲め智利へ赴くとは日本の各新聞に屢々掲載されたから、智利國では朝野共に藤島の來るのを待て居たさうな。

◎斯くあるとは神ならぬ身の藤島は少しも知らない、極めて質素に極めて節儉的に視察して歸ろうと云ふ考で智利へ上陸すると、官民共に大舉して出迎に來て居る、誰の出迎であらうかと傍人に聞て見れば自分の爲めと言はれて驚くとか驚くまいとか故國でさへこんな歓迎を受けたとの無い身の夢かと許り疑ふ位で、何が何やら薩張分らないが、仔細を聞いて始めて智利國では日本へ硝石を澤山賣込まんと希望から、日本の代表者が來たと云ふので大騒ぎをしたとが分つたさうな。

◎斯ふ云ふ歓迎を受けて而かも日本の代表者と迄重く觀られては、ケチな下宿屋へコツソリ這入る譯にも往かず據なく其地第一等の旅館へ迫り込んだ、スルト早速新聞記者は旅館へ訪問する、翌日の新聞には其談話と肖像とが出る云ふ騒ぎ、俄にエライ者になつて仕舞つて、萬事豫算外支出を爲さなけりや體面が保たれないと云ふ境遇になつたさうな。

◎大持てに持てたは宜かつたが、折角桑港から買込んで来た糧食は一つもお役に立たない、醬油も腐れば罐詰も腐ると云ふ始末、お負けに懐へ手を入れて見ると急頓直下に淋びしくなる勘定、半年も籠城する豫算が二ヶ月と滞在は六ツかしくなつて来る、其處で己むを得ず全速力で硝石の取調を爲し、這々の體にて歸朝したさうな。

◎祖山鐘三は嘗て倫敦に留學中一寸之れに似た様な奇談がある、一體倫敦では十二月卅一日大晦日の晩十二時過に黒人の來るのを新年第一に幸福が持ち來さるゝと云つて非常に喜ぶ習慣がある、だから彼等白人中で乞食などは態々顔から手足を黒く塗て大晦日の夜十二時過ぎ則ち元日の午前一時頃から、各戸を訪ふて歩くと大層喜んで金を與へて呉れるさうな。

◎所が祖山は倫敦では色の黒い方である、けれども新年第一に黒人の來るのを喜ぶ習慣あるなどは毫も知らないで、大晦日の晩或懇意な家へ遊びに往つた、スルト珍らしく大層喜んで御馳走を出したり、愉快に話をしたり、歸ろうとすればモットお話をさいと云つて却々歸さない、惣がて時計が十二時打つと祖山に向て、甚だ失禮だが一寸外へ出て近邊一廻りして再び來て貰ひたい、其間に面白い趣向を企て、霞くからと言つて頻りに頼むから、祖山は何心なく出懸けて再び其家へ

戻つた。

◎すると主人夫婦から子供召使に至る迄非常に喜んでソラ黒人の御入來ぢやとワイ／＼叫んで各々祖山の手を握り「眞に幸福よ」と騒いだ、祖山は何の意味か更に分らない、丸て煙に捲かれて下宿屋へ歸つて來たさうな。

◎下宿屋では又黒人が歸らないと云ふので痛く心配して居る眞最中へ祖山先生ヒヨコリ歸つて來たので、恰も福の神が舞ひ込んだかの如く、家内中非常に喜んで交る／＼握手した、祖山は益々分らなくなつて來て不思議なともあるものだと思つて居たが、後で能く聞いて見ると元旦早々黒人の入來は福の神の尊來と同様の意味に解されて居る習慣が分つて、自分の顔の色が黒いのに氣が附いて、開いた口が暫し塞がらなかつたさうな。

### 鐵道創設奇談

◎今では鐵道が出來て誠に便利だが、我國で最初鐵道敷設を唱へたのは大隈重信と伊藤博文だ、今より三十七年前だから随分抱腹絶倒な珍談がある、其れを弗々話して見やう。

◎大隈や伊藤が鐵道敷設を唱へたのは明治三年であつた、其時大隈は大藏大輔、伊藤は大藏少輔で、伊達宗城が民部大藏卿であつた、さて兩人が先づ東京から横濱へ鐵道を敷き、其れから尙ほ東海道を過ぎり京都大阪を経て神戸迄を幹線となし、又京都から敦賀迄を支線となすの說を唱へた所が、イヤハヤ反對者が多くて朝野擧て悉く反對したさうな。

◎其頃各藩から代表者を東京へ出して諸事を協議する所の、集議院と

いふのがあつたが、丸で反對論許りであつた、それも其筈サ三條、大久保、木戸なんどの先生達迄が鐵道尙早論で大隈や伊藤の説を却々容れなかつたさうぢや。

◎反對論者は如何なる理由かと聞いて見ると多くは鐵道尙早しと云ふのであつたが、前原一誠は軍事上から熱心に反對して曰く鐵道を敷けば外國兵が東京へ攻めて來るに便利になると、マー支那の義和團の様なものサ。

◎斯様に朝野舉て反對だから大隈伊藤も大層苦心した、井上馨なんぞは兩人に向て、激烈なる反對が多くて頗る危険だから、止めろと熱心に忠告したさうな。

◎けれども大隈と伊藤は封建の制度を打破して政令を一途に出してしむるには、運輸交通を便利にしなければならぬ、其れには鐵道を敷くより外ないと極力主張して遂にトウ／＼議論では勝つたさうな。

◎所て太政官會議で勝ち勝つたが其れなら收支の豫算を作つて見せると迫られた、是れには大隈も伊藤も閉口した、早速前島密を呼んで何とか甘く直ぐに豫算を作つて呉れまいかと頼むた、ソコ前島は一生懸命に徹夜して收支豫算を作つたが、鐵道憶測といふのが即ちそれだ、東京から横濱、其れから神戸迄の鐵道豫算が一夜に出來上つたとは何とスバラしいものではないか。

◎さて豫算も出來て太政官を説き伏せたが、金のないのに困つた、スルと恰も好し英國のネルソン、レーといふ人が同國公使館に滞在して、何か金儲がないかと漁ツて居る所で大隈や伊藤が鐵道敷設を唱へたが金のないのに困ツて居ると聞いて、早速驅附け金を世話すると言つた、兩人は渡るに橋と大に喜んで外務卿寺島宗則三人と百萬磅借入の



約束をしたさうな。

◎外國から借金するのだから政府部内の反對も多かつたが、大隈伊藤等は利害得失を説いて漸く外債募集に一決したさうだ、何でも其前にネルソン、レーと契約が出来て居つたと云ふのだから面黒いテ。

◎サー外債募集の事、世の中へ知れると反對と攻撃とが湧て來た、前原一誠などは其時に陸軍の全權を握て勢力あつたから、愈々激昂して大した騒ぎだ、頑固連は口を揃へて國を賣るの奸臣ぢやと言つて世間を煽てる、丸山作樂などは壯士頭で大隈や伊藤を脅迫したさうな。

◎其れから鐵道敷設外債募集に反對するの建白書は一二ヶ月中に數百通も出た、其中にタツた一人京都の醫者谷陽慶と云ふ者が賛成の建白書を出したさうな、此醫者は蘭學者で文明の頭があつたらしい。

◎其頃黒田清隆は外債を募集して鐵道を敷設するは國を危ふするもの

だと信じて、大隈伊藤をば國を誤るの奸臣賊子だと言つて三條大久保等に向ひ、涙を揮ふて速に兩人を退けると再三勸めた、其後間もなく黒田は開拓使の用務で洋行することとなつたが、其出發に臨んでも右の事を深く憂ひて、此際他國に赴くは如何にも心もとなしとて出發を躊躇したさうな。

◎所て僅か一年も経ぬ内に用務を了へて歸つて來るとガラリと議論が變つた、歐米視察の報告を爲す前に大隈に向て言ふのに、予は先づ君に謝さなければならぬ、不敏世界の大事を知らず、君等の計畫を妨げたのみか、國を誤る奸臣賊子だと謂つて、此に列座の三條公始め諸先輩に君等を斥けんことを迫つたが、今度西洋の文物を視て始めて分つた、實に面目無い、これから相携へて速に鐵道敷設の大業を成効せしめたいと言つたさうな。

◎黒田の賛成を得たので四面楚歌の裡に陥つたる大隈や伊藤はホット一息ついた、所が此に大問題が起きて来たといふものは、彼の外債募集は兩人に一任したのだから、条件も何も外の連中は少しも知らないて居つたのに、倫敦の新聞に詳しいとが残らず出て、年一割二分の利子で横濱の海關税が抵當だといふとが書てある、頑固黨は驚いたの驚かないのとソレは、大變な騒ぎとなつた、木戸大久保なども國辱に關すると言つて早速外債を返すに廟議一決したさうな。

◎何でも其頃の考ては他人の庫の中に貯へてある金を借りて来た様に心得、直に返さるゝものと思つて居たらしい、そこで前島密、上野景範兩人を早速倫敦へ外債償還の取調へに遣はすとなつたさうな。

◎兩人が愈々倫敦へ着て先きに外債を世話したネルソン、レーに逢ひ日本政府から借金の返済に出懸けて来たと言つたら、大層笑つて言ふのに、一個人の貸借と違ひ公債を發行して廣く募つた金だから、直に返さうと言つても駄目だ、其公債を買はなくちやならぬ、所て買ふとなると忽ち騰貴して滅法大損だから、止したが宜からうと懇々忠告した、前島も上野も借用證書一枚と思つたのが大に見當違ひて、公債てふものは左様な譯のものかと驚いたさうな。

◎けれども返金の使命を帯びて来たのだから、一片の忠告位いてナール程と回む譯にも行かず、兩人は相談して試みに日本公債を買つて見た、スルと忽ち評判が立ってドシ／＼騰貴するので大に驚いた、早速其旨を詳しく政府へ報告して止めるとにしたさうな。

◎マーこんな鹽梅で摺つた揉んだの内に月日も経つし、容易に返せぬものなら仕方がない、政府だつて實は財政困難の場合だから瘦我慢す

るにも及ばない、外國の金でも何でも使ッて早く鐵道を敷設した方が宜しいとの説が勝ッて、愈々新橋横濱間を第一着に敷設するとなつたさうな。

◎新橋と横濱間の鐵道工事を始めたのは明治四年で翌年竣工した、一切外國人が設計したのだが、其頃の工事請負などは實に無茶苦茶で、政府でも分らなければ請負つたものも分らない、随分頓珍漢なともあつたさうな。

◎神奈川と横濱の間は高島嘉右衛門が請負つたが、例の高島山を切り開いて線路を築く時に、嘉右衛門は高島山の別荘から望遠鏡で工事の監督を爲して居つたさうぢや、そこで嘉右衛門が言ふのには文明とは便利と言ふとだ、斯様に座ッて居て遠い所の仕事を監督するなどは文明の見本だと威張ッて居たさうな。

◎明治五年に新橋横濱間の鐵道が開通した時はポイントメンからヤードメン、さては出札から開札迄一切悉く外國人であつたさうだ、今から見れば子供でも出来る様な事を残らず西洋人に就て習つたのださうな。

◎所て一番面白いのは先きに極力鐵道敷設に反對した連中が、執念深くも尙ほ攻撃の材料を作る積りて鐵道に乗ッて見た、所が案外便利なので舌を捲いて大層感服し、イヤ是れは至極結構なものぢや、早く遠方まで敷いた方が宜しいと、忽ち前説を翻して大賛成者となつたさうな。

◎何しろ明治四五年の頃だから無理もないテ、明治十三年頃になつてさへ、而かも今では文明の中から生れ來た様に氣取ッて居る尾崎行雄が、新潟新聞に主筆て居た時に犬養毅が越後の如き大國を開くには鐵

道を敷設するのが何より急務だと論じたら、尾崎は躍起となつて越後の富を奪ふものだと大反對を爲したとは面白いぢやないか、其頃は尾崎も義和團に近い方だつたかも知れないサ。

◎鐵道創設の時分には澤山珍談もあつた、堂々たる先生が切符を買つて乗つたが、下車する時に渡すを知らないで紛失したり、或は新橋から横濱へ餘り早く着くので、未だ着く筈はないと謂つてモット乗して置けと威張る人もあれば、或は横濱から歌舞伎座見物が日歸りに出来るといふのを見て來た話をすれば、人を欺くと怒つて喧嘩した者もあつたさうな。

### 維新當時の奇談

◎明治維新の際の話を聽て見ると噴き出す様な滑稽などが澤山ある、

其當時から言へば不思議でも何でも無いが、今から考へて見ると餘り可笑いから一寸話さう。

◎先づ第一に徳川慶喜公が大政を奉還して今上天皇陛下御親政の下に太政官と云ふのが出來た、其れは所謂政府で一切の政治を遣らふと云ふのだが、其時に有金が僅に三百七十圓しか無かつたさうな。

◎是れては何事も出來ないと云ふので金持や豪商に向て御用金を仰付けたが、其説き方なんども種々様々で随分脅迫もしたが、其結果五百萬圓程集つたさうな。

◎五百萬圓の金は一時政府を支へるとが出来るけれども到底永持は出來ない、さらばと云つて租税を徵收するにも機關が揃はない、其處で紙幣を發行することを考へた、太政官札と云ふのが即ち其れだ、十圓に對し十三年目に利子三圓添へて十三圓渡すと云ふので、麗々しく札の

上に書いてあるから、マア一種の借用證文サ。

◎札を造つたは良いけれど之を通用させるに困つた、所て商賣人を集めて此札を無利息で澤山貸して遣るから品物を買入れ、其れを外國へ賣て金銀を受取て太政官へ返せと命令した、其時には外國貿易に限て貸付けると云ふのであつたさうな。

◎太政官札の外に惡貨製造をも造つたが、何でも三分中純金が廿五シカ含んで居らない、二百七十餘も銀が含んで居るのでドウしても金貨とは見えない、其處で硫酸で腐蝕せしめて金貨らしく見せ懸けたさうな。

◎太政官で斯様に惡貨を造るから各藩では得たり賣しと熾んに惡貨製造を始めた、其れは銀よりも却て廉い銅を土臺にして金を少々混ぜたのもあれば、巧みに滅金して金貨と見せるのもあり、尤て贋金計りと

なつたさうな。

◎贋金流行の結果外國人は大に苦情を唱へ、斯様に貨幣制度が紊亂しては商賣が出来ないと云つて太政官へ嚴談に及んだ、其處で據なく大阪に造幣局を建て、一牛懸命に貨幣を鑄造した、ツマリ外國の壓力に依て日本の貨幣制度が改革されたのぢやさうな。

◎幕末の攘夷家は種々の點から鎖國論を唱へたのだが、尤も著しき刺激を與へたのは經濟上から來たのだ、印度の饑饉の爲め米が外國へ賣行くので、ドン／＼米價が騰貴した、スルト攘夷家先生達は外國へ米が出ては内地の人民は食ふに困る、之を抑へるとが肝腎だと考へた、其れのみか米は日本許り産出するものと思ふて、外國へはモミ殼の附て居る分を輸出しては之を播種するから、嚴禁せよなどと叫んださうな。

◎北米合衆國南北戦争の爲め棉花が少しも英國へ輸出しないので、英國内の紡績業者は大恐慌を惹起した、其處で日本へも棉を買ひに来て精々買集めたが、スルと攘夷家連は此必要の品物を外國へ持出されては大變だと云つて熊本しんぶつたんの神風連しんぶつたんなどは京阪地方の棉屋へ暴ばれ込んで主人を斬つたり、又水戸の浪人は横濱の棉屋を暴ばれ廻つて亭主を殺したり、大騒ぎをした、現に薩摩藩が中國四國邊から棉を澤山買集め之を船に積ひて外國商へ賣ろふと思ふて馬關海峡を通ると、長州藩が其れを砲撃して燒いて仕舞つたさうな。

◎攘夷家には随分珍談があるが、明治三年に始めて東京横濱間に電信を架けた時に、毎日の様に電線を斬つて困つたさうな、中にも熊本の神風連は電信線の下を通る時には汚らばしいと言つて扇で頭の上を掩ふて通つたさうな。

### 萬國博覽會出品の滑稽

◎日本で始めて萬國博覽會へ出品したのは、今より五十年前則ち西曆千八百五十七年の巴里萬國博覽會であつた、出品の準備に専ら盡力したのは朝比奈間水で、ドンな物を出したかと云ふに多くは骨董物であつたさうだ、尤も其外に肥前から陶器、木臘を出品し、鹿兒島からは煙草を出品したさうな。

◎何しろ舊幕時代だから古物出品も無理ぢやないが、其頃諸藩の中で熾んに海外貿易の必要を唱へて出品を奨励したのは、佐賀藩主鍋島閑臈一人であつたさふぢや。

◎其れから明治六年に埃地利ウキンナで開いた萬國博覽會へは可なり出品も出來て見物人も七十人程出懸けたさふな、其時の出品協會總裁

は大隈重信で、副總裁は佐野常民であつた、大隈は博覽會へ往かなかつたが佐野は平山成信、渡邊洪基、松尾儀助、近藤信、山高信離、椎野庄兵衛、圓中孫兵衛なんぞ七十名を連れて悠々出懸けたさうな。

◎所が揃ひも揃ふて啞の旅行で、僅に英語を解する者一人半、佛語を解する者一人半、四人で漸く三人前と云ふ譯ぢやさふな、だから不便は堪まつたものでない、先づ旅館へ投じて第一に便所の分らないのはヒドク困つたさうな、小便壺に水が一杯入れてあるので、是れはテツキリ手洗鉢と心得、其中で手を洗つた者もあつたさうな。

◎其れから又湯殿には皆閉口したさうだ、栓を押して甘く湯を出したのは宜かつたが、止めるとを知らないでドン／＼流れ出るのには弱つたさうだ、其れのみか湯を汲み出して使はない様に出來て居るのを日本の風呂と心得ガブ／＼汲み出して使つたので奇麗に敷き詰めてある

絨緞の上を水だらけにして仕舞つたさうな。

◎尙ほ困つたのは食事であつたさうぢや、喰たいものが幾あつても言葉は分らないから仕方がない、其處で牛肉を喰ひたい時は兩手の人指指を額の上へ上げて角生いた真似を爲したり、又鶏を喰ひたい時にはコケツコーと鳴いたりしてヤット濟ましたさうな。

◎大勢の中には種々な失敗もしたが、己れの室を忘れて外國人の泊つて居る室へ飛び込むて叱られたり、外へ出て、歸るとが出來なかつたり、其れは／＼噴き出す様な事が澤山あつたさうな。

◎現に松尾儀助は旅館の前からツイと鐵道馬車に乗つて出懸けたが、歸りに乗つた馬車は旅館の前へ來ると思ひの外、飛んでもない所へ往つて仕舞つた、暫く佇立して考へて居るも、旅館の名も町名も記憶して居らない上に言葉は出來ないから聞くと尋ねるとも出來ない、其

内に日は暮れかゝる、風は吹いて帽は吹き飛ばさるゝ、愈々以て心細くなつてきた、其處で巡査に縋つて僅にジャバンホテルと一言を發した、其先さは何も言ふと出來ない、が巡査は分つたと見えて日本人の旅館は何處だと諸方聞き合せて漸く連れて戻つて呉れたさふな。

◎さて其ウキンナ萬國博覽會へは何を出品したかと聞て見ると、先づ古物に陶器、漆器、織物、茶、煙草は宜かつたが、名古屋城頭の金の鯀しやちほこに高さ一丈餘の大提灯、奈良の大佛のハリコなどを出品したさふな、大佛のハリコを出したのは何の意味だかサツパリ分らないが、見世物でも出す様な心持であつたらしい、實に滑稽至極な話サ。

### 演説の起原

◎日本で演説の開山は誰かと云ふと死んだ福澤諭吉である、何でも福

澤が或時慶應義塾の塾生數名を集めて、西洋に演説と云ふとはあるが、我國でも眞似が出來そうなものだ、と言つて或事柄に就て自分の意見を言文一致に綴つて、其れを讀むとも附かず話すとも附かず、立つてスラ／＼と遣つて退けて、演説は先づコンナものだらうと模範を示した、コレは抑日本に於ける演説の嚆矢ぢやさうな。

◎其れから福澤は塾生に演説の稽古を遣れと頻りに勧めた、加藤政之助、中上川彦次郎、小泉信吉、波多野承五郎なんぞが率先して塾内に演説の稽古を始めた、頃は明治九年で萬來社と云ふのを設けたさうぢや、千客萬來の意味から取つた社名らしく、其幼稚の程も見えるテ。

◎所て黄吻の書生ドウやら演説らしく喋舌らるゝ様になつたので、塾外へ押出して公衆の前で一つ遣らうぢや無いかとの説か起つた、加藤は其主張者の一人て、小泉と波多野とは大反對、中上川は中立であつ



たが、其反對論と云ふのは面白い、演説は互に學術研究の手段で公衆の前で遣るべきものでないと云ふのぢやさうな。

◎加藤等の説が行はれて遂に公衆に向て演説するとなつて其れから漸次演説會が流行した、所て政府では集會條例を設けて演説の中止解散を命ずるとが出来た様になつた、第一に中止されたのは加藤政之助で、當時諸新聞は言論の自由を妨害するものだと言筆を揃へて攻撃した、其結果中止を命じた臨監の警部は免職に爲つたさうだ。

◎古い演説家としては故人江木喬任馬場辰猪などは有名だ馬場と一所に演説場裡に馳騁した堀口昇は今でも達者だが、先年帝國生命保險會社の支配人を罷めてからどうしたか消息は知れない、變れば變る者だ、草間時福が大阪税關の官吏で生きて居ると同じく珍らしい方サ。

◎西村玄道は一時有名な演説家であつたが生死の程も分らない、斯う

云ふ連中を探つたら随分あるだらうよ、演説には雄辯と能辯とあるが、故小野梓は先づ雄辯の方であつたらうか、兎に角此男位ひ聴衆を感動せしめたものは少ない、餘り人を褒めない犬養毅が言ふのに、地方を廻つて見ると沼間が來たとか矢野が來たとか名前丈覺へて居るが、小野に限つて小野さんが來て斯う云ふ演説を爲したと云つて其主意を記臆して居るには感心したと述べたさうな。

◎鳩山和夫は始めて演説を遣つたのは明治十三年……と云ふと古いが實はエール大學卒業式の際優等生であつたゆゑ、卒業生總代の演説を英語で遣つたのが始めぢやさうな。何分生れてから始めての演説、而かも外國語ぢやから教師も心配して鳩山に草稿を書かして其れを朗讀的に稽古させ、ヤレ其處は聲を張揚げるとか、ヤレ其處は聲を下げるとか、ヤレ其處は右の手を揚げるとか一々教へたさうな。

◎其れから鳩山は一生懸命に鏡に向つて幾度か抑揚と態度とを稽古して、愈々式場へ臨んだが、始めの内は顛へて人の顔などは見えなかつたさうだ、所でエール大學創立以來今日迄に日本人で卒業生總代の演説を遣つたのは鳩山一人ぢやさうな。

◎三浦梧樓は演説としては上手でないが、比喩と警句が巧みて往々人を驚かすところがある、此先生には、随分奇談多いが進歩黨の會合に臨んで楠本正隆加藤政之助始め多人數の居る所で、何氣無しに僕は新參者だから黨の名士の綽名を知らなくて困る、マヌ男とは誰の事かへと尋ねると、或一人が三浦の袂を引きながら小聲で側に居た楠本のことだと云つた、スルト流石の三浦もギャフンと來て、フムそるか其れなら裏天とは誰の事かと云ひ出すと又候傍に居る加藤の事だと分つて大弱に弱つたさうな。

### 支那の奇風

◎支那に向て商賣を開かんと計畫して居る者は近頃頗る増加した様だ、其れに就て第一に注意すべきは先づ支那の事情を知るとである、所が對清貿易をやらうと云ふ者で、存外支那の實情を知つて居る者が少ない。

◎支那人は龍が一番好きだが、龜は何より嫌ひださうな、ドウ云ふ譯かと尋ねて見ると、龜はクイと訓じ母を姦するの意ださうぢや、其れとは知らずに或者は龜の形を彫刻した茶盆を澤山支那へ輸出した所が一枚も賣れなくて刎ね返されたさうだ、又横濱の龜樂煎餅を支那へ送つて損したのもあるさうな、商賣するには先方の嗜好を調べるとが實に必要じゃ。

◎嘗て東亞同文會が柳橋龜清樓て支那人と宴會を開かふとしたら右の理窟ておヂヤンになつた事があつたさうな。

◎其れから嘗て岩谷松平が天狗煙草を支那へ賣込もうとして種々運動したが、幾ら送つても買手が無いから、其譯を探つて見ると支那では天狗は大嫌ひぢやさうだ、其れから兎も嫌ひと云ふとだ、だから龜、天狗、兎などの繪が書いてあつたり、又其文字が書いてあつては迎も見込が無いさうぢや。

◎同じ巻煙草の事に就て失敗談がある、吸口に煙草の名を書いてあるのは更に賣れない、妙なともあるものだと思ふて能く調べて見ると、支那では文字を大切にすると是非常で、苟くも字を書いたものを地上へ棄つるが如きとあらば大變だ、其處で煙草の吸口に字が書いてあると其吸口の遣り場に困る、若し地上へ棄て、犬や馬に踏まれたならば、孔子様に對して申譯が無いと云ふので、吸口に文字のある巻煙草は吸はないさうぢや。

◎石鹼に就ても失敗談がある、或石鹼屋が支那へ能く賣れるから、是れは屹度香氣が能い爲めだらうと思ふて、更に香氣を高めてブン／＼香う石鹼を製造して送つた、所がバタリと止まつて賣れなくなつた、ドウ云ふ次第かと調べて見ると、斯うなのである。

◎其れは支那で石鹼を使い始めたのは好い香いだからと云つて、井や皿の類を洗うに用ゐたのである、所が餘り香が高くてブン／＼鼻に附く様では迎も食器を洗うに堪へない、洗つた後でも尙ほ香ひが残つて居ると云う始末だから、俄に使はなくなつたのださうな。

◎神田の支那料理屋で關羽樓と云ふ看板を掲げた、樓主の意見では支那留學生が近頃大層多いから、關羽の名を擔ぎ出したら必ず繁昌する

だらうと想つた、所が支那留學生は毎日其料理屋の前を澤山通るが誰一人入る者は無い、ドウ云ふ譯かと支那通に尋ねたら、支那では關羽を武の神様とし、孔子を文の神様として居る、其武の神様の名前を喰い物店の看板に亂用したから、誰一人入る者は無いのだと答へたさうな。

◎支那料理屋の主人大に驚いて忽ち官羽樓と改名した、スルと其翌日から支那留學生は頻りに喰いに往つたさうだ、支那位の文字の使ひ方に八釜しい國は無い、池田謙三の關係して居る東京貯藏銀行で先年北京へ支店を出したとがある、其時に日本の如く貯藏銀行支店と看板を掲げたら支那人は一人も金を預けに來ない、能く調べて見ると貯の字は皇帝の諱の字だから駄目なのだ、其處で貯藏銀行と改めたさうな。

◎支那には科擧の制があつて日本の所謂官吏登用試験のようなものだが、其試験の論文には歴代の皇帝の諱は皆避けなくてはならぬ、如何なる名文でも皇帝の諱の字を使つてあれば直に落第するとなつて居る、文字の國とは云ひながら呆れたものだ。

◎支那留學生が日本へ來て第一に驚くのは小さな店の看板に御菓子調進所だとか、御肴調進所だとか、御仕立屋とか頻りに御の字が書いてあるのを見て叱驚するさうだ、支那では宮中の御用達の外は決して御の字を使うとは出來ない、然るに日本ではアンな小さなケチな店が宮中の御用達かと云つて呆れるのださうな。

◎更に驚くのは料理屋の看板が到る所にあるのださうな、支那で料理と云へば國政を料理すると云ふの外使はない、飲食店の事なら普通旗亭と云つて居る、だから支那料理と云ふ看板があると實に目を圓くして驚くさうな。

◎一時支那貿易を盛にやつた廣瀬源三郎が、或時支那内地を旅行して旅館へ泊つた所が、旅館の主人は案内者の支那人に向て、何處の國の人を連れて來たかと謂つて痛く責めたさうな、所て傍に子供が論語を讀ひて居たから、廣瀬は二三行讀ひて遣つた、スルト主人はヂヤお前は孔夫子の道を學んだ人だと言つて、忽ち機嫌が直り大層親切に世話して呉れたさうな。

◎所て廣瀬は茶代なども餘計奮發して翌朝立つた、支那人の客が立つ時に皆外迄見送るのに、廣瀬をば見送らなかつた、依て廣瀬は案内者の支那人に向て甚だ失敬な旅館だと言つたら、ナニ支那人の客だと泥棒するから何か盗むて往かないかと思つて外迄附て行くのだ、お前さんは孔夫子の道を知つて御座るから安心して出ないのだと答へたさうな。

◎北支那地方の旅館は概して泊める丈けて飲食はさせない、食事は別に旗亭へ往つて喫るのだから、朝は早く起て料理屋へ駆込むのださうな。

◎支那では珍客だと主人公が自分の箸で御馳走を挟んで呉れるのは大に尊敬したのだ、故近衛公が先年往かれた時に到る所、其御馳走に預つたので胸が悪くて堪まらなかつたと言はれたさうな。

◎其上に又魚の骨などを卓子の下へ吐き出し、時々手鼻かひのには閉口だといふとだ、張之洞すら手鼻を遣らかしたさうな、シテ見ると李鴻章が伯林ホテルで緞子の窓掛にて鼻を拭ひたと云ふのも嘘で無いらしい。

◎支那の商店では金看板を澤山懸けるのは名譽で、何でも蚊でもゴタゴタ懸るが、マゝ日本て云へば正札懸直ぐしと云ふ所へ「爺爺不欺」

洋人倍加』とレイくしく張出してあるのには何人も呆れるさうな。

### 北京の奇習

◎北京と京都とは人情風俗餘程似て居るさうな、地形なんども頗る似て居る様で、桓武天皇時代の京都の地圖は今の北京と少しも違はないさうだ、だから京都出身の人が北京へ行くと故山へ歸つた様な心持がするさうな。

◎支那人は一體に芝居が好きだが、北京は特に大好きで主人は妻君から子供下女を連れて見物に出懸ける、其折には辨當を己れの家て拵へて持て行く所なんぞは京都風其儘で、其れに氣の永い所も能く似て居るさうな。

◎北京は淫風熾んで娘が縁附かざる内に妊娠するとは珍らしくない、所が少しく地位のある家では斯る不行儀の娘を親が殺さねばならぬ習慣がある、けれども母親は娘を可愛相だと云ふので父親に秘密の體に裝ふて、夜中竊に墮胎屋へ娘を連れて往くさうぢや、だから北京は到る所に墮胎屋の看板を下げて開業して居る、京都の昔も之に類似したとがあつたさうな。

◎北京では大層血統を貴ぶので男の子が無ければ大騒ぎぢや、女を人と云はない、或日本人が北京の某家を訪ふた時に女の子が澤山居るので、お宅では子供が何人ありますかと尋ねたら、イヤ子供は一人も無いと答へた、餘り不思議だから彼んなに澤山遊んで居るぢやありませんかと問返したら、ナニ彼れは皆女ですと答へたさうな。

◎其處で男の子が生るゝと上の髭を生やし、男孫が生るゝと下の髭を生やすさうだ、若し男の子が無くて髭を生やすなら彼奴は山師だと

云つて信用が無い、男の子が無ければ罷々生やさぬと云ふ位に男子を貴ぶとは世界中でも實に珍らしい奇風だ。

◎男の子を欲しいと云ふので妻を置くが、其れは皆夫婦相談の上である、だから妻を撰擇するには夫婦で能く見て然る後定めるのぢや、諸所に妾周旋屋があつて其處へ頼むと候補者は綺麗に飾つて夜駕籠に乗て来るが、妾に来る位だから皆借衣だと云ふとだ、主人よりも妻君の方が彼の身體では子供が出来るとか出来ないとか言つて容貌より體格検査ぢやさうな、此事なんぞも以前京都では流行したさうな。

◎支那の下等社會は人が悪くて油斷がならぬなど、云ふが、却々質朴の地方もあるさうぢや、北京の北三十里ゴビの沙漠へ往うとする途で萬里の長城の門に近き張家口と云ふ所では番人無くして物を賣つて居る、品物の側に代金が書てあるから旅人が其品物と代金と引換へて居

るのに店の者は一人も居無いさうぢや、總ての道德が此處迄發達すれば世は實に太平だ。

◎支那の旅館では室を貸せるのみで、食事は勿論、夜具に至る迄旅行者が自辨するのだ、ぢやから旅行するには夜具を携帶しなけりやならぬ、飯は旗亭で濟して泊り丈に行くのだ、シテ又何でも現金主義で而かも前金拂だ、旅店へ着くと直に宿料を拂ふ、湯を飲みたいと思はゞ一厘渡す、スルト持て来る、渡さなければ持て来ない、何故斯様な現金主義だかと云ふと旅行者は皆未明に出發するからださうな。

### 骨相學から觀たる實業家

◎西洋でも日本でも昔から骨相學といふがあつて人の骨相から觀て其氣質を判斷する方法がある、先づ骨相上から人の性質を四種に區別す

骨相學から觀たる實業家

るのである、其第一種は膽汁質で此質の人は皮膚が黄色で、眼黒く、顔色淺黒くて骨格逞しく、概して肥満な方で、物事を軽々しく感動しない、之を三味線の絲に譬ふれば三の絲の様なものさ、喜怒哀樂が容易に其色に現はれないで、意思が剛健であるから、多く實行的の人だ、併し細事を忘れて動もすると剛慢に流れ易く、從て事業を道つても破綻を生ずるとがある、強情の人、無頓着の人は多く此膽汁質から出る、此質の人は倫理教育を受けないと利己主義にのみ走つて惡徳者となる。

◎さて此膽汁質の内て能き人物の例を擧ぐればビスマルク、西郷隆盛などだが、實業家では誰が此質であらうかと謂ふに雨宮敬次郎、大倉喜八郎、田中市兵衛などは好適例だ、三人共肥満して居るし、意思が剛健で、實行的で、細事を顧みない、又事業に破綻を生じたとも能

く似て居る、雨宮の一起一伏は世間で知て居るが、田中は商船會社で一時手を焼き、大倉は明治廿五六年の交隨分苦境に陥つたところがある、日清戰爭で漸く恢復したが、彼れ是れ思ひ合はすと膽汁質の適例に相違ない。

◎其れから安田善次郎、高橋是清、池田謙三は膽汁質の組で、就中高橋がデブ／＼肥て無頓着で細事を顧みず、往時秘魯鑛山の失敗など能く此の質の特色に適つた徴候がある、又安田は強情で何人の意見も用ひない、物事には輕々しく感動しない、其れに意思が剛健で實行的で而かも利己主義の熾んな所などは實に膽汁質の短所長所を兼備して居る、金貸して成功した凄腕はエライものサ、池田の骨格は第一に此質を現はして居る、其れに容易に物事に感動しないのと喜怒哀樂を色に現はさないのと、意思の強いのは、慥かに膽汁質の男だ、澁澤榮一、



莊田平五郎、益田孝、末延道成なんぞも先づ此質の方だらうよ。

◎第二は神經質である、此質は丸て膽汁質の反對で、概して顔色蒼白く、總て柔さしくキャシヤに出來て居る、其激しいのは脈搏は早く且つ物など持つて居るに手が震へることがある、普通の人が感じ得ぬと迄も悉く感ずるのは特色だ、其處て人より早く悟るから機運を見るとき早い、豫言者小説家詩人などは此質の人である。

◎神經質にも二種ある、一はワンサイデッドと云つて此方は執念深く、怒り易く、又は考い深い等の人である、一はメネーサイデッドと云つて此側の人は多情多才、圓轉滑脱、輕佻浮薄、お人好し、心移り易い等の人である、能く發達すれば公平なる君子人が出來るけれども、一歩を誤れば幫間となるのぢや、シエクスピヤー、ホーマー、木戸孝允、近松門左衛門などは神經質の能き方の人となつて居る。

◎さて實業家中で神經質のものは誰かと云へば骨相から言ふと、山本達雄、磯野小右衛門、森村市左衛門、瓜生震、高島嘉右衛門、牟田口元學、矢野二郎、相馬永胤、高橋義雄などは先づ此質の方だらうよ、山本は先年未發行兌換券紛失事件の時に、五六の新聞から攻撃されたが、新聞の記事は痛く氣に懸ける男で、其後は新聞記者が面會を求めても一時逢はなかつたさうな。

◎磯野は神經質の長所である所の機運を見るとが早いので、相場師として成功した、高島嘉右衛門は又易斷に長じたのも神經質が與て力あるのぢや、牟田口元學が馬車鐵の事で内務省や市會と喧嘩したのは、正論には違いないが其の遣り方は神經質の本色を現はしたと謂つて宜し。

◎第三は多血質の人である、此の質の人は頭髮が黒くて兩眼藍の如く

青く、皮膚雪の如く白く、脈搏頗る強くて鋭い、此質の特色として物に熱し且つ義侠心に富むとが多い、所謂熱誠男兒は多血質から出るのである、若い時は多く此質の人であるが、唯目前の事のみを思ふて前後を考へぬのが缺點だ、播隨院長兵衛、島田一郎などは此派から出たのぢや。

◎多血質の長所は大和男兒の本領と呼ばれるとがある、實業界では添田壽一、園田孝吉、近藤廉平、朝吹英二、西村勝三、淺野總一郎、松本重太郎、豊川良平、馬越恭平なんぞがどちらかといへば此質の人だ、添田の熱誠なる所、園田の金放れの宜い所、近藤の部下に厚い所、豊川の義侠なる所などは慥かに多血質から來て居るのぢや。

◎第四は粘液質といふのであるが、此質の人は頭髮麻の如くサラ／＼として皮膚は灰色で、身體はムクミで、脈搏は至て弱く且つ遅い、其上神經が遅鈍であつて働かがない、概して臆病である、人に忠告せられても感じがない方だ、先づ湯屋の三助、のろまの下婢なんぞに多い、此質の人は人間中の最も劣等の側だから實業家にはない。

### 小説家の體格

◎胃の弱い人は多く夏瘦するが、假令達者な人でも夏は腸胃が弱るから十中八九は體量が減る、夏瘦の事から思ひ出したが小説家は揃ひも揃ふて瘦せて居るのは一奇だ、チヨツクラ數へて見やう。

◎村井弦齋、川上眉山、巖谷澁、江見水蔭、齋藤綠雨、廣津柳浪、石橋思案、徳田秋聲皆瘦せて居る、死んだ尾崎紅葉なども瘦せて居ることは幕の内ぢや、櫻庭篁村も先づ瘦せ方の組ぢや、坪内逍遙は今も小説家ではなく全く純粹の文學者だが、瘦せて居るとは小説家以上ぢ

やさうな。

◎何でも物には例外あるから小説家が必ず痩せて居ると定義を下す譯にも参らぬ、幸田露伴、嵯峨の屋おひろなどは則ち例外で骨太な肥へて居る方ぢやさうな。

◎日本許りでなく西洋でも詩人、小説家、文學者などは大抵痩せて居る様だ、有名なバイロン、ホープ、ルソー、シルレルなどは皆痩せて居た、最もバルザック、ゾラ、ホイットマンは肥ッて居たから是は例外ぢや。

◎其れから文學者や小説家は皆神經家らしい、綠雨、眉山、嵯峨の屋などは殊に神經過敏と言ひたい位じや、佛國の小説家モーパッサンと來ては非常な神經質で遂に發狂して仕舞ッた、元來痩せて居る者は比較的神經質の人は多い、或は神經質だから肥れないのかも知れ

ない。

◎齋藤綠雨は却々の神經家で其細心なるとは實に驚くテ、何でも自分の書いた小説を新聞雑誌に掲ぐると、一字の誤植にも大層心配して往々寢食を忘るゝとがあるさうな。

◎江見水蔭は柄に無き大膽家で、或は化物屋敷を探險したり或は戸隠山の巖窟へ這入ッたり、山中で野宿を遣ッたりして平氣の平左だ、彼の瘦せたる身體に斗の如き膽を有して居るのは實に珍らしい、其れに相撲が大好きで、邸内に土俵を造ッて熾んに稽古して居るのは不思議ぢや、聞けば取廻しだの化粧廻しだの何だの蚊だのと云ッて本職の持つ道具が揃ふて居るさうな。

◎川上眉山や巖谷漣は却々のおシャンぢやが、廣津柳浪と來ては少しも邊幅を飾らない、破帽弊衣更に意としない組で、何でも秀英舎へ往

て自分著作の小説を校正して居たら、秀英舎の校正係が新參の校正者と思つて大層愚弄したさうぢや、所が有名な小説家柳浪と云ふとが分つて校正連中は青くなつたさうな。

◎石橋思案は生粹の江戸見て頗る才子ぢや、其れに却々滑稽家て洒落と来ては頗る甘い、共に旅行でもしたら愉快で無聊を感じるとは決して無い、所が資性謹嚴で頗る潔癖の風があるさうな。

◎坪内逍遙が嘗て當今の小説家を評して曰ふのに、眞に満足すべき小説は一も無いが、變化が多くて面白いのは弦齋だらう、趣向の意表に出づるのは鏡花だらう、筆の巧妙なのは紅葉だらう、殊に現世的でイヤ味が無い、露伴は己れを寫すから少しく厭味があるのは惜いと、斯う言つたところがあるさうな。

◎村井弦齋は新聞小説としては最も成功して居る、何でも毎日一回の

内に必ず面白いとがあつて、其れに次回へ亘る所の切上げが甘い、續きものを中程から読み出しても分る様な仕組で實に上手だ、本人自身は却々道樂の多い男だ、鐵砲、釣、網打、玉突、碁、將棋其れから煙草、旅行、食物、飲物、園藝一々數へ切れぬ程ださうな。

◎尾崎紅葉は見掛に寄らぬ健啖家で、其食物に對する趣味の多く且つ深いには實に驚く程であつた、茶に次ぐに菓子、菓子に次ぐに西洋料理、西洋料理に次ぐに日本料理、と云ふ様な鹽梅だ是れては胃も堪えつたものぢやない、果然胃病で死んで仕舞つた。

◎紅葉の小説を讀むと、スラ／＼と書いた様に見へて少しも苦心の跡が分らない、所が非常に苦心して書くので、一字一句を苟もしない、毎日午前三時間午後三時間都合六時間費して一生懸命に書くので、拮据經營苦心慘憺一週間を経て尙ほ十行も出來ないところがあるさうだ、則

ち書ては直し直しては書いたさうな。

◎紅葉の原稿を見ると立派に消したり、貼紙をして其上へ綺麗に書いたり、丁寧なものには實に驚くと共に如何に苦心したかは歴々として分る、其れに小説の趣向にも却々苦心する男で、嘗て讀賣新聞に連載した金色夜叉の内のお宮を何處で殺さうかと云つて死場所を探す爲めに鹽原の温泉へ行つたり、佐渡迄も往つたことがあるさうな。

### 異性異質の配合

◎凡そ事業を爲すには異性異質の人が協同して經營するのは最も宜しい様だ、彼の三菱の二大人物莊田平五郎と豊川良平とは其性質が非常に異つて居る、此兩人の對照程面白いとは無いから一寸話さう、莊田は極めて冷靜であるが豊川は至て熱血である、だから莊田の所へ一身上

の相談を爲せば利害得失の判断は言ふが、人は人我は我れの主義で、決して世話する人でない、之に反して豊川は却々義侠心に富んで居て能く友人や後進の者を世話する男だ、或場合には臺所のとから結婚のと迄周旋する寧ろ世話好きと云つて宜しい。

◎莊田は沈着て容易に物に感じもしなければ動きもせぬと云ふ様な落ち着き拂つた人物だが、豊川は快活でイザと云はゞ直に劍を撫して起つと云ふ様な男である、其れから莊田は極めて緻密であるが、豊川は頗る粗大である、莊田は眞面目で極く几帳面で、例へば膳の据へ方が少し曲つて居れば之をキッチンと直して坐ると云ふ男だが、豊川は之に反して磊落な性質で隣りのお膳へ箸を入れ兼まじき風がある。

◎莊田は謹嚴で公私の區別が非常に嚴格である、豊川は公私混淆と云ふ程では無いが、動もすれば熱血と義侠とに驅られて公私の資格を忘

れて仕舞ふとがある、だから豊川には親み易く莊田には近より難いと云ふ趣がある、云はゞ莊田は二六時中少しも隙きの無い男で、如何なる場合でも油断は無いが、豊川は何處かにユツタリとした所があつて隙きがある様だ。

◎莊田は言語明晰で其談話は能く秩序が立つて居るが、豊川の言葉と來ては却々分り悪く、お負けに頭も尻も無い胴許り丸出しの話が出たりなどして、時々不得要領に陥るとがある。

◎莊田は品行方正で柳暗花明の間に風流を氣取るとなんぞは嫌ひな方だ、酒を飲んだからと云つて平生と少しも變るとは無、相變らずの眞面目だが、豊川は酔ふと隣人の肩に倚れて甘へる様な風があつて、車夫に待合へ急げつと云ふともあるらしい、先づ品行不正では無いが融通の利く品行圓滿の方である。

◎莊田は西洋流の人で殊に英國の紳士と云ふとを深く頭に入れて居る、だから何事も規律、秩序と云ふ様なとは至て入釜しい、其愛讀する所のものもアングロサクソン、シエベリオリテーなんぞの類である、豊川は東洋流の豪傑肌で其愛讀する所のものは資治通鑑、孟子なんぞである。

◎莊田は部下を使用するに人よりも先づ其事務の成績を見る方だが、豊川は事務よりも先づ其人物を見ると云ふとに注意して居る、則ち莊田は部下が責任を盡して其成績さへ舉げりや其人の性質の如きは強ち問ふべき程でないと云ふ流儀であるが、豊川は人間は有情の動物だから情を以て率ゆるとが大切だと言つて居る。

◎莊田は堅甲強胃て身を堅め、豊川は赤裸々の儘一口の正宗を揮つて敵陣へ飛込むと云ふ傾きがある、莊田は事業家て豊川は外交家である。

莊田は交友の範圍が狭いが豊川は實業社會は言ふ迄もなく、政治家、學者、軍人、醫者其他あらゆる階級に友人を持つて居る、莊田は内に居て机に向ひ種々計畫を案じて居るが、豊川は外に出て、働くことが多い、云はゞ三菱を代表して折衝の局に當る外交家だ。

◎要するに莊田と豊川位る性格の相反して居るのは實に珍らしい、莊田は水の如く冷々淡々の人物だが、豊川は火の燃ゆる様な男だ、彼は識の人て是れは情の人だ、併し兩人能く調和して何事も圓滿に進行する、蓋し異性異質は互に長短相助け合ふて好結果を得るものだから三菱の盛大なるは種々の原因もあらふが、先づ此兩人物が能く調和して居るからである、誠に申分ない配劑と云ふべしだ。

### 札幌農學校の學風

◎札幌農學校からは随分奇傑の士が出て居る、其れに農學を修めながら丸て方角違ひの職業に就て居るものが大部分であるのは一奇だ、第一回（明治三十年）の卒業生中で荒川重秀は船舶司檢官から文士俳優になつて居る、第二回の内村鑑三、第四回の早川鐵冶、志賀重昂、頭本元貞、菊地熊太郎などは誰が見ても農學士に適當な仕事を遣つて居るとは思はれない。

◎其れから北海道拓殖銀行取締役赤羽雄一、神戸ヘリヤ商會理事田内捨六、外務省翻譯官齋藤祥三郎なんぞも破格の組だ、其れから大井憲太郎と相捧て労働問題や社會主義を唱へて居る柳内義之進も札幌農學校出身であるさうな。

◎第一回の卒業生佐藤昌介は札幌農學校々長を勤めて居るが、彼れは農業經濟が大得意で評判も宜しい、同時代の渡瀬寅次郎は興農園主で

東京市參事會員であるが眞面目な男だ、新渡戸稻造は第二回の卒業生ぢやが在學中も英文の達者なことは有名であつた、彼れの著はした英文武士道は随分評判物となつて居る、又新渡戸と同時代の宮部金吾は理學博士で、世界の植物學者として名高いさうな。

◎内村鑑三は農學士としては少しも知られないが宗教家としては有名ぢや、學校時代には極めて成績がよくて卒業の時も首席であつた、彼の最も得意なのは水産であるといひては一驚を喫する、弟の達三郎も同校出身ぢやが、英文學は達者な方ださうな。

◎早川鐵冶が札幌農學校出身とはチト意外に感ずる、彼は北海道に林檎畑を持って居るので時々果樹栽培の説明など得意に話すのを聞いて見ると、成る程農學士の臭がするようだ、卒業式の時に英語演説をやつて氣焰を吐いたはよかつたが、後から校長と教師とに散々攻撃されたさうぢや。

◎早川は身の長五尺七寸もある大男だが、磊落て却々の快男兒だ、其れに義侠心のある人物で、友人や書生をよく世話してやる、借金の尻拭ひなどもして遣つたことは少くない、彼は見懸に寄らぬ藝人で長唄などは得意だが、一番好きなのは芝居だ、歌舞伎座や明治座の變り目には缺かしたとはない、ソシテ涙脆い男で芝居見物の時には女の様に屹度泣て居るさうぢや、彼は先年妻が死んだ時にオイ／＼泣いて眼を泣き腫らしたとがあるさうな。

◎札幌農學校出身者には教育家が一番多い、中學校、農學校、師範學校杯の校長教員を勤めて居るものは百四十餘名ある、中にも中學校は最も多い、何だか教員養成所の様な心地がする、併し此學校出身の教育家で教科書收賄事件に關係したものは一人もない、道德堅固なのは



實に感心ぢや、尤も此れは特別の原因があるから序に話さう。

◎一體札幌農學校の校風として道德の高いのは一ツの特色となつて居る、其遠因は學校の創立者とも謂つて宜しいダブリュー、エス、クラークの感化力である、此男は米國マサチューセツツ州に農學校を設けて居たが、南北戰爭の際農學生を率て北軍に投じ、軍功に依て陸軍中佐になつた人物ださうな。

◎此クラークを雇ふて札幌農學校の創設に連れて往つたのは時の開拓使長官陸軍中將黒田清隆である、互に横濱から玄武丸に乗て出懸けたが、船中で黒田はクラークに向ひ生徒の道德は何を標準として教養するかと問ふたら、クラークは聖書を以て標準とすると答へた、スルト黒田は其奴は困る、日本では耶蘇教反對が多いから見合せて呉れろと言つたさうな。

◎クラークは却々承知しないのみか、其れなら斷然辭して歸國するから、船を横濱へ返して呉れろと迫つた、黒田も大いに弱つて其問題は愚圖々々にして仕舞つた、愈々開校したがクラークは日曜日や其他閑暇の折には學生を聚めて聖書の講義をやつたが、黒田は知つて知らぬ振して居たさうな。

◎クラークは精神的教養に熱心で品性を養ふとに全力を盡いた、自分は北海道の寒いとを聞いて居るから、冬季の飲料として葡萄酒を澤山に携帶して往つた、所が學生に禁酒せしめようと思ふて其唯一の樂みである葡萄酒を一本も飲まず十數罇悉く打壞して棄てたさうな、之を目撃した學生は痛くクラークの精神に感激したさうぢや。

◎又クラークは或日學生を引卒して植物採集の爲め山奥へ探險に出懸けた、スルト珍しい苔が岩上に生えて居るのを發見した、其處で自ら

四ッ這になつて己れの脊の上へ昇つて速にあの苔を採れと命じた、學生は誰あつて先生の脊の上へ昇るものはない、所がクラークは何故躊躇して居るのか、早川は脊が高いから早く私の上へ昇つて取れと命じた、依て早川は據なく靴を脱ぎかけたら、ナニ靴の儘てよろしいと言つて直に其苔を採らしめたさうな。

◎クラークの薰陶が札幌農學校生徒に一種の人格を造らしめたので、今日幾多の教育家中比較的道德の高いのは全くクラークの感化が残つて居るからださうな。

奇傑奇策に乗せらる

◎明治の昭代にも奇傑の士は少くないが、田中正造や死んだ平岡浩太郎などは慥かにその一人だ、此兩人の性質は丸て異つて居るが、平

岡は水滸傳的人物で小説かと思ふ様なことが澤山ある。

◎平浩は一體意志の強い男で、執着力は旺盛で、却々剛情な人物ぢや、其れに自惚れと來ちや天下第一と謂つても宜しい、彼れは随分突飛なことを謂ふが、概して其談話は順序が立て頗る聴くべきところがある、マア話上手の方ぢや、何でも皆自分が實驗した様に聞える、所が本人發明の事はなくて大底皆他から聞いて來たとを巧みに話すので、其甘

いとは最初話した本人よりも遙かに上手ぢやさうな。  
◎平浩は實に變り者で學問と來ては大嫌ひだ、お負けに學者をも大嫌だ、其處で學者の噂さを持出すと彼は腕を扼し疎辭を捻りながら「ナニ學問で人物が出来るものか、學者は皆金で追遣はれて居るではないか、人は守る處一つあれば足る、乃公は論語一卷讀んだばかりだ、併し社會に推出せば學者も博士も此論語一卷先生に及ばぬてはないか」と

奇傑奇策に乗せらる

勝手な熱を吹いて居たさうな。

◎彼に能く人を褒め又能く罵る男で、昨日褒めた人も今日は忽ち罵ると云ふ風だ、が併し彼が二十餘年間褒めてく褒め抜いた者が唯ツた一人ある、其れは赤池炭坑の小使から坑長となり遂には小松炭坑の坑主となつて二三十万圓の財産を造つた兒島哲太郎であるさうな。

◎此兒島哲太郎は筑前福岡の貧家に生れた者で十五六歳の頃は牛乳配達をして家計を助けて居たのであるが、其後間もなく赤池炭坑に奉公したのであるから、勿論無學文盲である、併し哲太郎は少年時代から平浩にも劣らぬ意志の強い性質で無口ではあるが、其代り動作敏捷で、萬事平浩の理想に適つたものだから、二三十万の財産を拵へる迄、トン／＼拍子に累進したのであるが、哲太郎は位置の進みに隨て夜手習した結果、今では往復文位自由に書けるやうになつたさうな。

◎平浩は炭鑛家ではあるが半身政治家である、然るに一冊の政治書或は雑誌を見ないのみならず政海の波瀾洶湧の際でも東京の新聞二十有餘種中一として讀まなかつた、甚しきは外交問題に對して政友と意見を異にし、甲是乙非、世評紛紛囂囂を極めた時でさへも「問題の真相が新聞で分るものか」と見くびつて一切之を手にしなかつたさうな。

◎彼の道樂種々ある中で、最も金を掛けたのは書畫、骨董、盆栽、の三種ださうな、斯の三道樂のため費やした金は約五拾萬圓と謂ふとだ、何でも八九萬圓で買入れた品物を先年大阪で二萬餘圓で擲放したさうな。

◎黒人筋の話が面白い、「平浩は三道樂の月謝として五拾萬圓中の二拾萬圓位は取られて居る」と、是れは明らかに彼れの三樂の真相を喝破した妙評である、だから彼れの全盛時代は、彼れの行く先々に古道具

屋が五月蠅ほど附纏ふたさうな。

◎彼が骨董眼を誇つた一つ話がある、曾て筑前の或る古道具屋で掘出物をやつたのが妙珍の甲である、彼は之を八圓で手に入れた、處が案外に稀代の珍品で、何れ元龜天正時代の戰場に用ひられたのであらふ、真向に敵の打込んだ一文字の刀痕がアリくと現はれ、兵個に値踏したら千圓以上ださうな。

◎彼は其甲を奇麗に塵を拂ふて床頭に飾り、これ見よがしに訪はるゝ人毎に誇つた、先年何かの用事で筑前に往つた井上伯は之を見るや否や、垂涎三尺頻りに所望した、けれども彼は斷じて應じなかつた、所が數年の後、博多築港の用向で岩崎彌之助男が博多に往たときに之を見て欲しくて堪まらないが、平浩は逆も手放さないと思つたので、暫らく拜借と出掛て其儘東京へ持歸つたさうな、平浩は掌中の珠玉を奪はれた様な氣で、返却を迫らんと思案最中岩崎から手紙が來た、披いて見ると『過日の御返禮』と大書して金千圓添へてある、流石の平浩も開いた口が暫し塞がらなかつたさうな。

### 戦機と商機

◎日露開戦前東洋の時局切迫した際に、英國などでは無論戦争になるだらうと思ふて、倫敦デリー、テレグラフ(電報新聞)記者パーレーが戦時通信員として日本へ來た、米國からもアツンシエーテット、プレス特派員イーガンが來た。

◎大倉喜八郎は右のパーレーを自邸へ招いて一夕響應したが、其際パーレーが言ふのには、時局問題に就て聊か考へて居るともあるが、併し御高見はと遣つて退けようとする、大倉は是非貴下の御意見を承

はりたいと懇請したので、バーレーは徐ろに其意見を語つたさうな。

◎先づバーレーが言ふのは我英國には昔ネルソンと言ふ偉人があつた、英國の今日あるは全くネルソンのお蔭である、其譯は佛蘭西が主謀となつて歐羅巴の艦隊を聯合して英國の艦隊を全滅しようといふ計書したのを、ネルソンが探知して、好し我より機先を制して彼等の準備未だ整はざるに乗じて打ち破らふと、早速英國の全艦隊を率ゐて聯合艦隊の集中して居る西班牙のトラファルガルへ向つたのである。

▲所てネルソンが聯合艦隊の集つて居る所へ入港しようとする、「入港するな」との信號を示した、けれどもネルソンは聴かずに軍艦を進行させると、今度は急使が小蒸汽船で何か書いたものを持って來た、見ると「武装を解け」とあるので、ネルソンは態と潰れて見えない方の方目へ眼鏡を掛けて、ナニ此紙には何も書いてない、進め〜と號令して

到頭灣内へ突進し、其處で直に發砲して聯合艦隊を滅茶〜に破つたのである。

▲其結果英國は制海權を掌握する事が出來て、貿易は大に擴張せられ、國勢は隆々として發達し、商工業は駁々として進歩したのである、であるから英國の今日あるは全くネルソンのお蔭と云はねばならぬ、所て、私が英國に居る頃は露西亞の計畫は例の恐喝政略で戰意ないものと思ふて居たが、西比利亞を経て滿洲に入るに及んで、露の軍事的設備が恐喝でなく、粗末ながらも眞の戰鬪準備であることが分つた。

▲其處で私は日本へ往つたら定めし出師準備最中であらう、政府も國民も擧て開戰に熱中して居るであらう、否軍艦も兵隊も既に出發したであらうと思ふて來た所が、案外にも靜かな様で實に驚いた、露西亞の準備といつても未だ極めて不完全だから、此時に乗じて日本が攻撃

せば必ず勝つに相違ない、彼の歐羅巴聯合艦隊の準備整はざるに乘じて英國の艦隊がトラファルガルで之を全滅したと同じ様な場合だ、今の日本で何より入用なのはネルソンであると滔々辯じたさうな。

◎スルト大倉喜八郎は大に感心してナール程ソウだ、露國の横暴と其意思とは既に明白であるから彼の準備未だ整はざるに乘じて一撃を加ふべしだ、ネルソンが欲しいなアと頻りに歎息して居た、恰も其翌日侯爵伊藤博文が大倉の宅へ遣つて來た、スルト早速前夜バーレーが語つたのを鸚鵡返しに述べて、我國で今入用なのはネルソンだと言ふと伊藤は『馬鹿言へ、其ネルソンは乃公だ』と怒鳴つたさうな。

◎其れから伊藤は大倉の宅で晝餐を喫して直に御前會議へ赴いたさうな、後て大倉は好し伊藤さんがネルソンは乃公だと言はれたから、今日の御前會議は屹度開戦に決するだらうと信じて、遽かに軍用品準備に着手したさうな。

### 商人立志編中の人物

◎貿易商堀越善重郎の經歷に就ては頗る面白い事がある、其れに彼れの艱難辛苦した話は商人立志編に載せても宜しい位だから聊か話さう。

◎堀越は野州の生れて家に餘財としては少しもないから、木村半兵衛の小僧となつて絹織物の商賣に従事して居たが、鋭敏で能く忠實に働くゆへ、木村も感心な小僧だと思ふて引立てて遣る氣になつた、所が本人は是非東京へ出て、學問したいと熱心に希望するので、木村も愈々學資を補助するに決心し、今の高等商業學校の前身である商法講習所に入學するととなつたさうな。

◎學校を卒業すると亞米利加へ行きたいと思ふて百方苦心した、けれども何分赤貧の身であるから洋行費の出所は無い、親戚知友などに相談したが、矢張駄目だ、木村にも頼んで見たが一も二もなく勿付られた、最早頼みの綱も切れて只だボンヤリとして徒らに心配して居たが、其極遂に腦病に罹つたさうな。

◎洋行したいと云つて病氣にまてなつたから木村も其熱心を憫んで遂に賛成した、其處で堀越は早速不用の書物や衣類其他のものを悉く賣拂つて少しく金を作り、又木村からも出して貰つて都合三百圓出來た、先づ旅費丈け出來たから米國へ渡りさへすれば何か仕事があるだらうといつて、矢野二郎に其顛末を話した、スルト矢野は「至極宜からう、其れては己れが紹介状を書いて遣らう」と言つて紐育の領事高橋新吉に宛てた添書を呉れたさうな。

◎其頃(明治十七年)は銀紙の差があつて百圓が米國の八拾弗にしか替へられない、堀越は三百圓を金貨と銀貨とに引換へて其内五拾弗で米國行の下等切符を買ひ、愈々太平洋汽船會社の船に乗込んだ、所が八月の酷暑の最中不潔の支那人や豚などと同居であつたから嗅くて耐えられなかつたさうな。

◎桑港へ着いて三日間逗留し其れから紐育へ向て出發したが、殖民用の極下等な汽車に乗つた、其れでも貨錢は七十五弗取られたさうぢや、紐育へ着く頃には懷中に最早三拾弗しか残つて居ない、其心細さ加減は口に言へない位だ、さて紐育へ着いたのは夜の十二時過であつたが、何處も彼處も光り輝いて居るので、丸て熱病やみがランプを見るやうな鹽梅であつたさうな。

◎日本出發前に日影町で大枚貳圓五拾錢で買つた古洋服を着た儘停車

場から出てボンヤリして居たが、巡査に頼んで日本人の行く旅館へ案内して貰つた、所て旅籠料を聞いて見ると一日三弗と云はれてギョツトした、若し此分て一週間もグズグズして居たら一文なしになるから。◎翌朝早速矢野の紹介状を持つて高橋領事を訪問したが、ドウにかして遣らうといはれたので、其れを力に一先づ旅館へ歸つて今度は商家人名録を繰つて見て、日本に關係のありさうな商店三四軒へ「私は日本に居て三年程生絲の業に従事した者だが雇口を探して居る」と云ふ様な手紙を出した、スルとアイザック、ブラザースといふ雜貨商から來て見ると云ふ返事が來たので、地獄で佛といふ心持で飛んで往つた、所が給料は一週五弗といふので、下等の下宿でも一週間六弗要るから一弗足し前せなければならぬ、けれども遊んで居る譯に往かぬから其處へ行て働いて居たが、双方面白くなくつて忽ち罷めて仕舞つたさうな。

◎其頃丁度紐育に日本の相撲があつて荒竹虎吉が大評判で一週百五十弗乃至二百弗取ると云ふ事だ、堀越は其相撲の所へ行つて遊んで居ると、「ドウも森村組の關口さんは早く來て呉れないから困る」と言つて居たから、堀越は是れ幸ひと思つて「ドウダイ私が通辯をしようか」と言ふと大層喜んで是非頼むといはれて、其れから相撲の通辯になつたさうな。

◎二週間許相撲と寝泊りをして其れから又高橋領事を訪ふて周旋を頼むと、シカゴのフレッチャー商會から教育ある日本人を一名頼みたいと云つて來て居るので、早速其所へ往くことになつた、幸ひ相撲から貰つた報酬が十五弗あるから其金で出來合の洋服を買つて日影町の二四五十錢と着換へた、所が西洋人の寸法で仕立てたのだから何分不揃て



胸も脛もダブ／＼して袖などは指迄隠れて仕舞ふ位だ、其不格好などはお話にならなかつたさうな。

◎さてシカゴへ着いて早速フレッチャ―商店へ行つたが、高橋領事からの通知で今度は日本の商業學校を卒業した學識ある手代が來ると云ふので、ドンな立派な人が來るかと思待ちにして居る所へ、ダブ／＼した不揃の洋服を着た異様の男が出掛けたので、何れも眼を圓くして叱驚したさうな。

◎此フレッチャ―商會で給料を定める時に堀越は瘠我慢して「私の目的は商業を研究するにあるから給料などは幾らでも構はぬ」と言つたので、一週僅かに六弗と定まつた、所が下宿料を拂つたり洗濯賃を拂ふと辨當代が出て來ない、據なく晝飯を抜きにする決心を爲して、毎日十二時になると料理屋へ晝飯喰ひに往くと云つて飛出し、空腹を

抱へて諸方の商店の前をブラ／＼歩いたり、橋の上へ茫然立つて汽船の發着を眺めたりなどして、應て午後一時になると晝飯喰つた様な顔付をして店へ歸つて來たさうな。

◎或時の論文を書いてタイムス新聞の通信員に見せたら、其れを上手に添削してタイムスへ投書した、其論文がタイムスへ出ると諸方の新聞が轉載して大變な評判となつた、イヤ伶俐な日本人とか、活潑な男だとか云ふて、ダブ／＼して袖丈の合はない洋服を着て居た堀越が俄にも尋ね者になつた、スルとフレッチャ―も此新聞を讀んでコンな感心な男を安く使ふのは氣の毒だと云うので一週六弗から忽ち十弗に引上げて呉れた、其れて漸く晝飯に有附くとか出來たさうな。

◎堀越は散歩の折不圖マーシャル、フキールドの店で日本製の手巾のあるのを見付けて、早速其れを買ふて木村半兵衛の所へ送つたさうな、

其れから手巾が澤山米國へ輸出する様になつたのぢや、後にフレッツチヤ一の店を罷めて、メーソンと云ふ人と共同して手巾、羽二重等の組織物賣買を始めて漸次發展したのぢやさうな。

### 貧兒の奮闘

◎茨城採炭會社專務取締役で石炭業者から東京商業會議所議員に推された阿部吾市は先年第一銀行へ金三千圓を二百五十ヶ年長期預金を爲して人を驚かしたが、以前は三千圓どころか三文の錢にも窮したとがある、父喜市が郷里美濃で失敗して妻子を携へ上京したのは吾市が七歳の時であつたが、一時は非常に零落して芝日蔭町に一ヶ月僅か七十錢の家賃で、見る蔭もない哀れな生活を爲して居たさうな。

◎其頃愈々窮して父は人力車を挽き吾市は八才の幼時であつたが氷を賣つて歩いた、金春なんぞは第一のお得意で、烏森の藝妓屋へセツセと賣りに出懸たさうな、所が母親は兼て病身であつたが、遂に病床に倒れる様になつたので、吾市は看護の傍ら時々氷賣に出ては僅かの錢を得て母を慰めて居たさうな。

◎母が死ぬ三日前に蕎麥が食べたいと云ふので、吾市は氷を賣つた儲の數文で近所から蕎麥を買來たさうぢや、所が其途中で父が客を載せて車を挽て往くのに出逢つた、サア父は歸つてから後で八釜しい、親は車を挽き子は氷を賣る貧乏で蕎麥を食ふとは贅澤だと言つて散々に叱つた、是が今に至るも阿部家の一つ譚となつて居るさうな。

◎吾市は母が死んでから後稻荷壽司を賣て居たが何分小供のとだから甘く行く筈もない、其れに父は家を借りて世帯持つて居ては苦しいから、互に奉公しよう云ふとなつて親子の別れをやつた、其處で吾

市は早速桂庵へ驅着て酒屋の小僧となつた、酒一升賣れば三厘とか醬油一樽賣れば一錢とか貰つたさうぢやが、感心にも其れを使はないで貯へて居た、併し字を知らないのて役に立たぬと云つて追出されて仕舞つたさうな。

◎其れから又小間物屋へも奉公したが甘く往かず、十一才の時芝白金の最上寺へ往て小坊主になつた、此時始めて讀み書きを少し習つたが、お經覺える迄には容易でないから、墓の掃除を遣つて居た、婆さんなんぞが墓參りに來て一錢二錢惠んで呉れるのを大切に貯へて居た、買食いたしたい盛りの腕白時代ぢやが、貧てふ敵に苦められて金錢の大切を知つた爲めに、子供ながらも無暗に使ふとは出来なかつたものと見える。

◎寺へは這入たが生漕坊主となるのは厭やだと思つて又飛出して京橋銀座一丁目仙臺屋と云へる笹筒屋へ小僧奉公に住込んだ、併し字を知らないと云ふのて追出された、けれども外に行く所も無いへから寺へ戻つたが、暫くして三田のてんまやと云へる質屋へ奉公した、其時に今の三田銀行頭取である山口善兵衛も同質屋へ大僧で奉公して居た、吾市は此時十三才で山口から熱心に讀書を教はつたさうな。

◎所て吾市は父が何處に何をして居るか少しも知らない、父喜市も亦悴が死んだか活きて居るか其れさへ分らない、父子相見ざると八年、吾市は或日新聞紙を見て居ると不思議にも父の名前があるので、驚いて能く讀んで見ると淺野總一郎の回漕部に勤めて居るとが分つた、其れから直ぐ尋ねて往つて蠣壳町の父喜市の寓居で親子八年間の辛酸奇遇を涙と共に語り明したさうな。

◎夫れから吾市は父の紹介で淺野に逢ひ石炭部の下役に使はるゝとに

なつたが、其時は十六才であつた、浅野の宅に泊つて居て夜晝となく働いて居た、浅野は早起で毎日大抵五時頃に外出するが、吾市は四時に起て讀書して居るから毎時でも浅野の下駄と靴を出す役に極つて居た、浅野は吾市の此勉強に感心して深く信用する様になり、追々引立てたのぢやさうな。

◎吾市は其後浅野から横須賀出張を命ぜられて造船所や軍艦等へ石炭を納むる事を掌つたが、浅野に儲けさせると共に、自分でも相應に儲けた、爾來大に運が開けて父子共に勤儉貯蓄し、吾市は六年を経て東京へ戻り父と一所に傍ら石炭及コークスの販賣を遣つたり、又解船を造つて回漕業を營んだり金儲けにはぬかりが無かつた、今では解丈にても七十餘艘持つて居るさうな。

◎吾市は父に隠して二千石積の古帆船を買つて之を修繕し、成功丸と名けて航海を始めたが、二度目に難船した、所が幸い保険を付けて置いた爲めに三千圓程手に入つた、其處で不幸中に思はぬ三千圓を獲たのだから此金を後代子孫の爲めと又國家公共の爲めに供したいと云ふので、父の意見に従ひ二百五十年長期預金となつたのぢやさうな。

◎二百五十年目でなければ第一銀行から引出されぬ様に契約を結んであるが、尙ほ萬一後代子孫中に半途で契約を廢止するとの無い様に、親戚知人二十餘名を集めて一會を組織し、之を鳳尾會と名けて、連判帳がある、其中には浅野總一郎、中濱東一郎、西園寺龜次郎等も居る、さて其利殖表を見るに三千圓の基金が年六朱の利として五十年目には五萬五千二百六十一圓となり、其以後百年迄は五朱として百年目には八拾萬三千五百九十六圓となる、其後は五朱として百六十年目に千四百九十六萬九千七百一圓となり、二百五十年目には一億三千四百四十九